大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

Annual Report 2023

拠点長挨拶

田中敏宏
大阪大学理事・副学長

大阪大学は、人文学研究科日本学専攻をはじめ、人文・社会科学のあらゆる分野において、「日本」を対象とする研究者を全国有数の規模で擁しています。留学生教育の全国的拠点である日本語日本文化教育センターを擁している点も本学の重要な特長です。

グローバル日本学教育研究拠点は、そうした豊富なリソースを組織横断的に活用し、研究面では、「日本」を手がかりとして新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを、教育面では、あらゆる研究分野の学生に対し研究成果をわが国において社会実装しようとする際の基盤的な知見を提供することを目指しています。

2020年12月に設置された本拠点は、COVID-19パンデミックの影響を受けてきましたが、その制約の解けたいま、世界の拠点的日本研究機関を結ぶネットワークのハブとしての役割を一層強化していこうとしています。また、そのような国際的視野に立ちつつ、本学の「学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム」(Double-Wing Academic Architecture: 通称 DWAA) に基づく教育プログラムを展開することにより、学際性をそなえ社会連携を指向する新たな人材を「日本」という現場において育成しようとしています。

皆さまには、本拠点の取組にぜひご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

Director's Message

TANAKA Toshihiro
Executive Vice President, Osaka University

Across all branches of the humanities and social sciences, Osaka University is home to a particularly eminent assortment of researchers engaged in the study of "Japan", including those based at the Division of Japanese Studies at the Graduate School of Humanities. Another key feature of Osaka University is its Center for Japanese Language and Culture (CJLC), which stands at the heart of the national education of exchange students.

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (グローバル日本学教育研究拠点, GJS-ERI) is designed to take advantage of these rich institutional resources in ways that cut across organizational boundaries. In terms of research, GJS-ERI aims to serve as a new interdisciplinary and international platform for the study of "Japan", and in terms of education, the Incubator strives to provide students from all fields with the knowledge necessary for the practical application of research results for the good of society.

GJS-ERI was founded in December 2020 amid the challenges raised by the COVID-19 pandemic. Now that the restrictions put in place due to the pandemic have been eased, the Incubator has redoubled its efforts to serve as a networking hub among institutions involved in research on Japan. At the same time, by continuing to develop and expand educational programs that incorporate both the Incubator's international outlook and Osaka University's Double-Wing Academic Architecture (DWAA) system, GJS-ERI is employing its unique setting in Japan to train new global talent with both interdisciplinary capabilities and an enduring interest in social engagement.

We warmly invite you to participate in our events and initiatives.

目　次

1　拠点長挨拶
田中敏宏（大阪大学理事・副学長）

4　GJS-ERIとは
5　What Is GJS-ERI?

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 拠点形成プロジェクト
6　京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究
8　在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築
An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature
10　社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発

2022年度採択 拠点形成プロジェクト
12　東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性
14　21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築
16　オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

2023年度採択 拠点形成プロジェクト
18　人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発

20　コラム　「宣教師が翻訳した和歌　キリシタン版『日葡辞書』と幕末のフュレ神父」
岸本恵実（大阪大学大学院人文学研究科教授）

教育プログラム
22　大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」
24　大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」
26　大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」

28　コラム　「他者と「共にある」ということ　ポスト体験時代の記憶の継承に向けて」
三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

30　**国際シンポジウム**
インターセクショナリティと在日性［開催報告］
31　プログラム
32　開催報告
宇野田尚哉（大阪大学大学院人文学研究科教授）
33　ご参加いただいた先生より
趙寛子（ソウル大学校日本研究所副教授）

34　**国際シンポジウム**
在日コリアン文学をグローバルな文脈で読みなおす［開催報告］
35　プログラム
36　開催報告
シンディ・テキスター（ユタ大学助教授）
37　International Symposium Report
Cindi Textor（Assistant Professor, University of Utah）
38　ご講演をいただいた先生方より
金煥基（東国大学校教授）
39　ナヨン・エィミー・クォン（デューク大学准教授）

40　**月例ワークショップ**
40　GJS Research Workshop
41　講演を終えて
私たちの「冒険」　しがない一言を、これからも足し続ける
温 又柔（作家）
43　GJS-ERI拠点形成プロジェクト主催　研究会・セミナー・シンポジウム

46　**GJS Research Workshop 2023年11月例会**　**Book Talk Series**
日本近現代史ワークショップ　Laura Heinさんを迎えて［開催報告］
46　『新ケンブリッジ版日本史』第3巻（2023年）と
『ポスト・ファシズムの日本：戦後鎌倉の政治文化』（2023年）をめぐって
ローラ・ハイン（ノースウェスタン大学教授）
48　Reflections on *The New Cambridge History of Japan*, 2023
and ポスト・ファシズムの日本 戦後鎌倉の政治文化 2023.
Laura Hein（Professor, Northwestern University）
49　ワークショップの後で
成田龍一（日本女子大学名誉教授）

50　**Graduate Conference**
第5回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies

52　コラム　「「ことばの杖」を手放す／手渡す。　李良枝と温又柔」
渡邊英理（大阪大学大学院人文学研究科教授）

54　今年の活動を振り返って
56　年間活動記録
57　構成員一覧
59　編集後記

GJS-ERIとは

グローバル日本学教育研究拠点（Global Japanese Studies Education and Research Incubator、略称GJS-ERI）は、人文・社会科学系の各部局でなされているディシプリン・ベースの取組の成果を踏まえつつ、教育研究の両面で次のような新たな展開を牽引していくことを目的として、2020年12月1日に設置されました。

まず、研究面では、「日本」を手がかりとして人文・社会科学の最先端の学問的対話が交わされる新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを目指しています。そのような新たな学術プラットフォームとして「グローバル日本学」を構築し、「日本」からグローバル・アカデミアに向けた研究発信力の強化を達成することが、本拠点の研究面での目的です。

つぎに、教育面では、そのような研究成果を学際的・社学連携的な教育プログラムとして展開することを目指しています。日本の文化や社会についての幅広い知識は、理系を含むあらゆる分野の学生にとって、研究成果を社会実装しようとする際の基礎的素養として役立ちます。研究成果を社会実装するための基礎学として「日本学」を位置づける立場から、学際的・社学連携的な教育プログラムを展開し、「日本」発の独創性をそなえたグローバル人材を育成することが、本拠点の教育面での目的です。

さらに、以上のような新生面を拓くための基盤として、本学で積極的に取り組まれている大量のデータに基礎づけられたデータ駆動型の教育研究に、人文・社会科学系の領域において「日本」研究の立場から注力しようとしています。

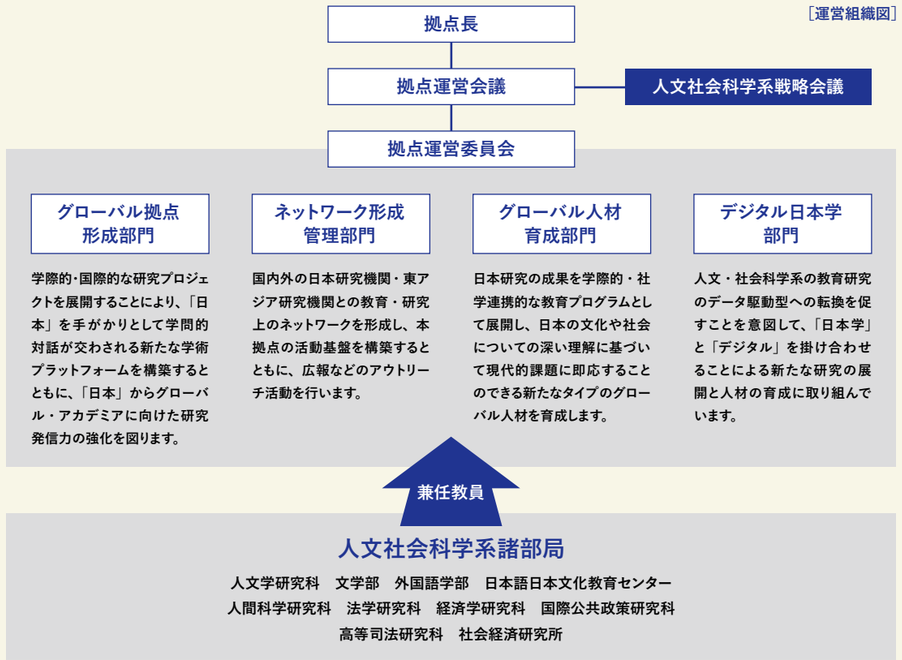
What Is GJS-ERI?

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (GJS-ERI), established at Osaka University on December 1, 2020, aims to generate new advances in research and education on Japan by integrating the benefits of work done in both the humanities and social science disciplines, actively adopting data-driven approaches to make the most of the rich assortment of materials accessible at the university.

In terms of research, GJS-ERI serves as an international and interdisciplinary platform for the exchange of advanced academic dialogue relating to the study of Japan. The research efforts of the Incubator are geared towards creating an environment conducive to the development of Global Japanese Studies and to the effective dissemination of research results from Japan to the global academic community.

Further, GJS-ERI endeavors to translate its research results into valuable interdisciplinary and society-oriented educational programs. For students in all fields, including the natural sciences, a broad understanding of culture and society is useful when considering the practical applications of research results. Therefore, the Incubator aims to create educational programs that incorporate the study of Japan as part of an essential foundation for the training of global talent.

［運営組織図］



拠点形成プロジェクト

2021年度採択 研究拠点構築型

京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究

Research on the Kyoto School and Post-Kyoto School Philosophies of Science and Technology

プロジェクト概要

本プロジェクトは、西田幾多郎、田辺元、三木清、中井正一、下村寅太郎、今西錦司、岩田慶治といった京都学派やポスト京都学派の哲学者・思想家たちによって花開いた日本独自の思想を、科学哲学・技術哲学の側面から研究するものです。若手研究者や隣接分野の研究者の協力を得ながら、多方面に展開した京都学派の現代的意義を明らかにするための研究拠点の形成を目指しています。文化人類学、科学技術社会論、哲学をつなぎながら学際的に研究に取り組む山崎吾郎（CO デザインセンター）を代表として、学内からは、科学哲学研究者の森田邦久（人間科学研究科）、日本哲学研究者の織田和明（情報科学研究科）が参画しています。学外からは、昨年度まで代表を務めたフランス現代思想と日本哲学の専門家である檜垣立哉（専修大学）、日本哲学とフランス哲学の専門家として活躍するミシェル・ダリシエ（金沢大学）、日本哲学をベースに環境倫理や技術倫理を論じる犬塚悠（名古屋工業大学）、日本哲学とその当時の科学との関係を研究するフェリペ・フェハーリ（四日市大学）、西田、アンリ・マルディネ、大森荘蔵の哲学を研究する森野雄介（金沢学院大学）が参加しています。今年度は、国際会議でのパネルセッション、研究会やシンポジウムの開催を通じて議論を深めてまいりました。いずれのイベントにも日本哲学に限らず隣接分野から関心を持つ研究者や学生が多数参加しました。

2023年の取り組みと成果

2023年度は、12月までに国際会議でのセッションを1つ、オンライン・対面のハイブリッドでの研究会を1つ開催しました。

国際会議パネルセッション
Reevaluating the Theory of Technology in the Kyoto School

日時：2023年9月7日［木］16:15–18:00
会場：University College Cork（UCC）West Wing 6
使用言語：英語

プレゼンテーションタイトル

Higaki Tatsuya, “Shimomura Toratarō’s Philosophy of Science”
Yamazaki Goro, “The Influence of Cultural Anthropology on Miki Kiyoshi’s Philosophy of Technology”
Oda Kazuaki, “Nakai Masakazu’s Philosophy of Technology: A Fusion of Japanese Modernism Thought and Philosophy of Existence”

アイルランドのコークにあるユニバーシティ・カレッジ・コーク（UCC）で開催されたThe 7th Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy（ENOJP-7）にてパネルセッションを行いました。プレゼンターは檜垣、山崎、織田の3名です。檜垣は、昨年度の研究会に続いて下村寅太郎の科学哲学について論じました。下村の「世界的世界」という西田の影響を色濃く残す術語に注目し、数学と西田哲学を踏まえて既に西洋化された日本を自ら作り替えていくものとして読み解いています。山崎は、三木が当時の文化人類学から受けた影響に着目し、現代の人類学が向き合う主要な理論的関心が、三木によって先取りされていたことを明らかにし、その哲学の現代的意義を再評価しました。織田は、中井正一の言語論とその発展版にあたる「委員会の論理」における技術と疎外の問題を分析しました。そして、中井の思想を、虚言を退けて信頼できるコミュニケーションを形成するための議論として読み解きました。

パネルセッションでは、世界各地から参加していた日本哲学研究者とディスカッションをすることができました。オーディエンスからは、京都学派とは何かという根本的な問いや、現代日本において科学技術のもたらした最大の課題の一つである福島第一原子力発電所事故について、京都学派や京都学派の技術哲学の立場から語れることは何かといったアクチュアルな問いが提示されました。いずれの問いも私たちの哲学観にかかわる重要なものであり、充実したディスカッションとなりました。世界各地の研究者との交流を通じて、国際的な研究ネットワークが強化されました。

研究会「岩田慶治：「京都学派およびポスト京都学派」という文脈において」

日時：2023年12月9日［土］15:00–17:00
会場：オンライン（一部対面）
開催言語：日本語
参加者：17名
講演者：西垣 有（関西大学）

『岩田慶治を読む：今こそ〈自分学〉への道を』の共著者である西垣有先生をお招きして「岩田慶治：「京都学派およびポスト京都学派」という文脈において」をオンラインで開催しました。この研究会は、大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACTオープンプロジェクト「哲学の実験オープンラボ」との共催でした。

岩田慶治（1922–2013）は文化人類学者であり、東南アジアでのフィールド調査、そして日本文化への独自の視点から分析を経て、〈自分学〉や新アニミズム論というユニークな理論を構築したことで知られています。西垣先生は、岩田の思想を、西田幾多郎や西谷啓治を中心とした京都学派や、同時代に新京都学派の一人とも呼ばれた今西錦司、主に戦前に活躍したアメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトや現代ブラジルの文化人類学者ヴィヴェイロス・デ・カストロの思想と対比しながら論じていきました。そして岩田の思想の特徴を、親鸞や道元といった日本の仏教思想を踏まえながら、一と多が〈同時〉に、入れ子構造で直接無媒介に現れる「個物と全体がそこでキラキラとかがやいて互いに相侵すことがない」世界を描くものであると明らかにされました。西垣先生のご講演、そして参加者とのディスカッションを通じて岩田の思想の持つ大きな可能性が示されました。哲学と人類学の交流によって、新たな京都学派研究、そして日本哲学研究の可能性が開かれました。

今後の活動／まとめに向けて

2024年1月には本プロジェクトの総括シンポジウムを開催しました。

シンポジウム「京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在」

日時：2024年1月28日［日］13:00–17:00
会場：大阪大学豊中キャンパス　基礎工学国際棟1階　セミナー室（ハイブリッド開催）
開催言語：日本語

プログラム

山崎吾郎「プロジェクト紹介」
眞田 航（大阪大学）「西田哲学とポストモダン――他者の問題をめぐって」
岡田悠汰（京都大学）「ハイデガーから三木清の技術論を読む――現代技術哲学への寄与に向けて」
近藤和敬（大阪大学）
「三木清の西田の絶対無の解釈から『構想力の論理』の読解へ――三木のスピノザ解釈を手掛かりに」
近藤・岡田・眞田・山崎・檜垣立哉・織田和明・シンポジウム参加者「総合討議」

3年にわたって展開してきた大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究」の総括シンポジウムです。フランス哲学・ドイツ哲学・日本哲学の分野で活躍する気鋭の中堅・若手研究者を招き、日本哲学における科学哲学および技術哲学について深く掘り下げました。ディスカッションには、本プロジェクトのメンバーも参加し、この間の研究プロジェクトの総括をしました。

本プロジェクトを通じて、国内外に広がる研究ネットワークを構築することができました。今年度でプロジェクトは終了となりますが、来年度以降も本プロジェクトの成果を継承・発展させるべく、新たな研究プロジェクトの準備を進めています。

2023年9月に参加したENOJPコーク大会にて、懇親会の様子

2023年12月に開催したハイブリッド研究会の様子

プロジェクト代表者

山崎吾郎（大阪大学COデザインセンター教授）

プロジェクト構成員（学内）

森田邦久（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
織田和明（大阪大学情報科学研究科特任助教）

プロジェクト構成員（学外）

檜垣立哉（専修大学文学部教授）
DALISSIER, Michel（金沢大学国際基幹教育院任期付准教授）
犬塚 悠（名古屋工業大学大学院工学研究科准教授）
FERRARI, Felipe（四日市大学総合政策学部准教授）
森野雄介（金沢学院大学基礎教育機構講師）

拠点形成プロジェクト
2021年度採択 研究拠点構築型

在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築

An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature

Project Summary

Since its work began in 2021, this collaborative project has been engaged in fulfilling the pressing need to construct an international network for research on "Zainichi" ("Japanese-resident") Korean literature, an inherently transnational and translingual subject that remains understudied both inside and outside of Japan. An improved understanding of Zainichi Korean literature is crucial not only for achieving a balanced perspective on the scope of modern literature written in Japanese, but also because the Zainichi Korean experience highlights key topics in contemporary literary and cultural studies worldwide, including issues of diaspora, migration, identity, discrimination, and the memory of empire. The project has achieved considerable results in scholarship on these issues.

With its central location in Osaka, home to more Zainichi Korean residents than any other prefecture in Japan, GJS-ERI has proven to be an ideal base for a research network bringing together academics and writers who are working on Zainichi Korean literature in languages including Japanese, Korean, and English at leading institutions from around the world. Project members are affiliated with universities in the United States, Japan, Canada, Australia, and Hong Kong, and events arranged by project members have allowed Osaka University to welcome speakers and writers from South Korea, Taiwan, and elsewhere. In this way, the project serves to connect advanced researchers who are already focused on learning from the Zainichi Korean experience to the unique historical resources and rich contemporary community found in Osaka.

2023 Activities

In 2023, with the easing of the coronavirus pandemic, members of the Incubator-Supported Project had significant opportunities to collaborate face to face. In January, the project sponsored a two-day event bringing the Taiwanese-Japanese writer On Yūjū to the Osaka University campus for in-depth discussions on the writing career of the Zainichi Korean writer Yi Yang-ji (Lee Yang-ji). This event was facilitated in particular through the assistance of GJS-ERI-affiliated faculty member Watanabe Eri (Professor, Osaka University). As the keynote speaker, On discussed the effects of Yi's writing on her own development as a writer and her involvement in the production of a new anthology of Yi's writing which was released in 2022. Project members Catherine Ryu (Associate Professor, Michigan State University) and Nobuko Yamasaki (Associate Professor, Lehigh University) were among those who gave presentations on the second day of the workshop, and a revised version of On's talk at Osaka University was published in the May 2023 issue of the national literary magazine *Subaru*.

Next, in February 2023, project member Jonathan Glade (Lecturer, University of Melbourne) visited Osaka University along with several graduate students for the three-day workshop "Developing and Leading 'Global Japanese Studies' in the Asia-Pacific", making in-depth conversations about future overseas collaborations and publications possible and encouraging the University of Melbourne to join GJS-ERI as a member of the Consortium for Global Japanese Studies. Later in 2023 Glade published the article "The Korean Restaurant: Beyond Violence in Zainichi Korean Film" in the *Seoul Journal of Korean Studies*, and he thanked GJS-ERI for its support in his acknowledgments.

In the July and August of 2023, overseas Project Representative Cindi Textor (Assistant Professor, University of Utah) visited Osaka as part of an official cross-appointment agreement. During her time at Osaka University, the Incubator-Supported Project was involved in international symposia held in Osaka and South Korea. First, Project Representatives Nicholas Lambrecht (Assistant Professor, Osaka University) and Cindi Textor and GJS-ERI Associate Director Unoda Shōya visited Dongguk University in Seoul to speak at the co-sponsored symposium "Intersectionality and Being Zainichi", a bilingual event held in Japanese and Korean. There Textor spoke about the writings of authors Min Jin Lee and Yū Miri, while Lambrecht responded to a presentation on the writer Ri Kaisei (Lee Hoesung).

Then Textor, project member Sakasai Akito (Associate Professor, University of Tokyo) and several guests from Japan, South Korea, and the United States gave presentations at the major GJS-ERI international symposium "The Global Contexts of Zainichi Korean Literature", another bilingual event held in Japanese and English. This event, moderated by Unoda and Lambrecht, was attended by several domestic and overseas members of the GJS-ERI project. Textor's presentation compared the writings of wartime Zainichi Korean author Kim Saryang with those of the contemporary Japanese-resident Iranian author Shirin Nezammafi, while Sakasai spoke about Min Jin Lee's popular novel Pachinko. After the symposium project member Ijichi Noriko (Professor, Osaka Metropolitan University) met with speakers from the symposium in Osaka's Korea Town and led them on a tour of the new Osaka Korea Town Museum (Osaka Korea Town Rekishi Shiryōkan).

In addition, although not among the direct output of this project, project members including Ryu, Textor, Yamasaki, Christina Yi (Associate Professor, University of British Columbia), and Andre Haag (Assistant Professor, University of Hawai'i at Manoa) released the volume *Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire* via the University of Hawaii Press in November 2023. This volume included multiple chapters discussing cultural production related to the Zainichi Korean community in Japan.

Heading Toward Completion

Altogether, the GJS-ERI project remained very active in 2023, and it is expected that members of the group will continue to collaborate after the official end of Incubator support in the spring of 2024. In early 2024, further published articles are expected to appear, based in part upon the feedback and discussions arising from the international symposia held over the summer. In particular, articles by the project representatives about intersectional aspects of the Zainichi Korean experience are expected to run in a Dongguk University academic journal in South Korea in the spring. Moving forward, output may also appear in Australian publications. Additionally, the materials that the Incubator has received from the personal archives of the prominent Osaka-based Zainichi Korean poet Kim Sijong are expected to create new opportunities for publishing research results. Finally, the project expects to search for new outside funding support to continue and enlarge its collaborations in the coming years.

Project Representatives

Nicholas LAMBRECHT
Osaka University Graduate School of Humanities, Assistant Professor

Cindi TEXTOR
University of Utah (USA), Assistant Professor

Osaka University Collaborators

YASUOKA Kenichi
Osaka University Graduate School of Humanities, Associate Professor

External Collaborators

IJICHI Noriko
Osaka Metropolitan University, Professor

TOBA Koji
Waseda University, Professor

SAKASAI Akito
University of Tokyo, Associate Professor

Felipe MOTTA
Kyoto University of Foreign Studies, Lecturer

ZHONG Zhang
Independent writer

Catherine RYU
Michigan State University (USA), Associate Professor

Christina YI
University of British Columbia (Canada), Associate Professor

Jonathan GLADE
University of Melbourne (Australia), Lecturer

So Hye KIM
University of Hong Kong, Lecturer

Nobuko YAMASAKI
Lehigh University (USA), Associate Professor

Andre HAAG
University of Hawai'i at Mānoa (USA), Assistant Professor

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 教育プログラム開発型

社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発

Development of the Graduate Program for Advanced Interdisciplinary Studies in “Theory and Practice of Minority Education in Japan”

プロジェクト概要

誰一人取り残さない社会の実現をめざして国連サミット（2015）で採択されたSDGsの目標の一つに「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」（目標４）が掲げられています。日本でも2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）が公布され、全国で夜間中学校の設置・整備が進められるなどの教育改革が行われています。特に近年、増加・多様化の傾向が著しい外国にルーツをもつ児童生徒への教育・支援は焦眉の課題です。そこで本プロジェクトでは、外国にルーツをもつ児童生徒に対する教育や学習・生活支援の現状と課題およびその課題解決に向けた取り組みについて高度な知識・技能を有し、さまざまな教育の現場でそれらを十全に活用しつつ、また効果的にネットワークを駆使して協力体制を敷きつつ、そうした取り組みに尽力できる人材の輩出をめざして、前期課程大学院生を主な対象とする高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」を開発し、国際的・全国的な教育課題の解決に実働的に貢献し得る高度な専門的知識・技能をもつ社会人の育成・輩出をめざします。

2023年の取り組みと成果

人間科学研究科・人文学研究科が提供している関連科目を組み合わせ、受講生の既習の知識・技能および受講後における学習・研究の展開過程を考慮してカリキュラム化し、主として博士前期課程の大学院生を対象とする大阪大学大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践（Theory and Practice for Minority Education in Japan）」を構築しました。2022年度は、1年目に開講されている講義科目の整備を、2023年度は、2年目に開講されているフィールドワーク実践科目の整備を行いました。受講生によっては、2年目からフィールドワーク実践科目を履修するのではプログラムの修了がかなわないことが明らかとなり、1年目の後期からフィールドワークが開始できるようにカリキュラムを調整する必要がありました。フィールドワークは、2022年度は、大阪府教育庁、大阪府立福井高校、同西成高校のご協力を得て、2023年度は、守口市立守口さつき学園夜間学級、大阪市旭区社会福祉協議会、大阪府立大阪わかば高等学校等のご協力を得て、実施しています。

プログラムは、Aコース（特に既習の知識は必要なし。文系理系を問わず、さまざまな分野の学生が受講可）・Bコース（学部ですでに日本語教育の専門基礎知識・技能を習得している大学院生向け）に分かれています。それぞれのコースでの学習を通して、以下の能力を備えた大学院生に修了認定証を授与する予定です。いずれのコースにも、下記①②③を達成するための〈理論研究科目群〉と、下記④⑤を達成するための〈実践応用科目群〉がそれぞれ設置されています。前者は、フィールドワークに出るために必要な専門基礎の知識・技能を身につけることを、後者は、理論研究科目を通して身につけた知識・技能を実地で活用してフィールドワークを行いながら、「現場で活きる」専門的な知識・技能を身につけることを目的としています。

① 教育学の基礎知識と日本におけるマイノリティ教育の現状と課題について理解している。
② 日本のマイノリティ教育の現状と課題について自分の意見をもち、論じることができる。
③ 日本語教育と母語保障に関する専門基礎の知識を獲得している。
④ ①〜③の専門的知識・技能を、フィールドで課題解決にむけて適用することができる。
⑤ マイノリティ教育／日本語教育・母語保障を主題とするアクションリサーチを実践することができる。

2022年度には5名の大学院生（人間科学研究科・人文学研究科）、2023年度には3名の大学院生（人間科学研究科・基礎工学研究科）が受講を開始しています。2023年度末には、初めての修了生が出る予定です。

従来、人間科学研究科の修了生は、現代日本の教育事情、とりわけ外国にルーツをもつ児童生徒の教育や学習・生活支援の現状と課題には精通していても、日本語の教育や母語の保障に関する知識・技能・ネットワークは十分にはもっていませんでした。他方、人文学研究科の修了生は、日本語の教育や母語の保障に関しては専門知識・技能を有しますが、国内外の教育事情や時事問題について詳細に学ぶ機会がほとんどありませんでした。本プログラムでは、人間科学研究科と人文学研究科の教員が協力し、さらに大阪府教育庁および大阪府内の学校と連携してフィールドワークを実施することによって、現代日本の学校教育の課題に専門的な観点から適切かつ効果的に対応できる人材を育成・輩出し、人文・社会科学系大学院の教育研究の社会実装を図ることをめざしています。

また、上記カリキュラムの整備とは別に、2024年2月4日にグローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト・シンポジウム「これからの『戦後』への教育学」を実施する予定です。このシンポジウムには、外国にルーツのある児童生徒への学習支援で連携してきた黒田恭史氏（京都教育大学）をお招きしました。黒田氏は、大阪大学に在籍するウクライナからの留学生とともに、ウクライナから避難してきている子どもたちの学習を支援する活動を展開しています。その活動にまつわるお話を中心に、これまで約80年、日本が培ってきた平和教育の知識・技能をいかに今後の国際社会で生かし得るかを、広島と沖縄をフィールドとする平田仁胤氏（岡山大学）と古波蔵香氏（福岡教育大学）とともに議論します。

今後の展開

本高度副プログラムの主軸を担ってくださっていた教員が2023年度末をもって退職されることになり、講義科目の継続が困難になりました。ですが、幸い、本プログラムは、2023年4月に設立された「大阪大学大学院人文学研究科附属「複言語・複文化共存社会研究センター」と事業内容が重複するため、センターに事業を引き継ぎ、本プログラムは2024年度以降、募集を停止することにいたしました。とはいえ、フィールドワーク実践科目の構築過程で培った地域連携のネットワークを生かして、夜間中学校における外国にルーツのある生徒への学習支援事業、大阪大学の留学生による国際理解教育の推進は、引き続き、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ・基幹プロジェクトの一部として継続する予定です。

プロジェクト代表者

岡部美香（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

榎井 縁（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
櫻井千穂（大阪大学大学院人文学研究科准教授）
加藤 均（大阪大学日本語日本文化教育センター教授）
松岡里奈（大阪大学日本語日本文化教育センター特任講師）

協力機関・連携機関

大阪府教育庁
守口市教育委員会
大阪府立大阪わかば高等学校
守口市立守口さつき学園夜間学級
大阪府立福井高等学校
大阪府立西成高等学校
大阪市旭区社会福祉協議会

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性

Designing a Comprehensive Framework for Analyzing the Materiality of East Asian Cultural Heritage Objects

プロジェクト概要

これまでエスノグラファーは、人びとのモノをめぐる経験を、局所的なコンテクストに即して解釈しがちでした。民具の収集において、「コミュニティの過去の経験を伝える貴重な資料」としての側面が強調されるあまり、人びとがそれを廃棄しようとしていたという事実が無視されてきたのもそのためです。しかし、アパドゥライが強調するように、「モノの社会生活」に着目すれば、モノが作られ、運ばれ、消費され、廃棄される各局面はいずれも重要です（Appadurai, 1986）。モノの意味は複合的であり、複数の異なる方法によって構築され、表現されるプロセスを、モノ情報としてイメージすることが必要だからです。

コンテクストということについて、これまで人類学者はさまざまな用語や概念を用いて考察を行なってきました。例えば、ファースやハリデーの社会的記号論の端緒ともなったマリノフスキーは、現前の「言語による交信やことばのやりとりに関わる直接的光景や音響」としての場（状況）のコンテクストと「当事者の背後と、彼らが携わっている行為の背後にある文化的歴史の総体」としての文化のコンテクストを区別しました。 マリノフスキーが区別したこれら二つのコンテクストは、チャールズ・サンダース・パースが区別した3種類の記号のうち、指標記号（index）と象徴記号（symbol）に相当しています（『パース著作集2 記号学』1986 (1903)）。

これら二種類の記号への着目は、異なるタイプの人類学の存在を示唆しています。隣接性――すなわちエスノグラファーとインフォーマンとが場を共有すること――によって、人びとの間の社会的相互行為の意味に近づこうとする人類学と、表象――すなわち社会的に「XX」と意味づけられているものやこと――に焦点をあてる人類学です。初期の人類学は、現地でのコンテクストの共有によって人びとの思考や行為を理解しようとしてきました。現地でのフィールドワークによってインフォーマンとコンテクストを共有することで、人びとの思考や行為に近づこうとしてきたのです。しかし、人や事象の本質的な属性に見えるものも解釈されたものに過ぎないとする社会構成主義は、人類学の分析対象を表象が構築されるプロセスへと変化させました。近年、表象主義は、人間の解釈の特権性を主張するものとして批判されるようになってきています。本プロジェクトが「モノ」の多義的意味に着目するのも、この批判的潮流に位置づけられます。

類像記号としての「モノ的情報」

「モノ」の多義的意味を研究する具体的な分析枠組みとして、2023年度、本プロジェクトでは、類似性のコンテクストに即した枠組みを構想しました。パースは、2つの上記2種類の記号に加え、もう一つ類像記号を区別しています。類像記号（icon）は、類似性によって対象と関わる記号です。類似性のコンテクストは、場と文化のコンテクストを接合させる点で重要です。新しい道具や表象が受容され、あるいは廃棄されるのは、それらを「似てはいるが同じではないモノ」として意味づけるコンテクストにおいてであると考えられるからです。

このような分析枠組みに即して、2023年度、本プロジェクトでは昨年度に続いて以下の研究課題に関する研究を行いました。それぞれの研究課題に関して、人類学的な側面からの仮説提示をほぼ終え、有望な研究領域を絞り込むと同時にイメージング分光学的な分析の具体的な手法の検討に入っています。

（1）安平壺の製造・流通・消費

台湾・台南において現地調査を実施し、安平壺の製造・流通・消費に関して、特に福建省から台湾にコンテナーとして輸送されてきて以降の二次利用、二次消費に未だ十分に解明されていない研究課題が存在していることが判明しました。二次利用、二次消費では、祖先祭祀に関係する利用などもあり、無地の安平壺に彩色や文字が描かれることがあり、経年劣化で薄れた図像をイメージング分光分析で再現可能であることもわかり、次年度の分析計画を立てているところです。

（2）大工道具などの分析

土佐などの国内の産地と、台湾を含め内外の消費地の大工道具を分析することで、明治期以降の大工道具、および生産技術の流通について、本年度は、四国地方及び台湾での現地調査により、周防大島に関連する民具がどう使われなくなり、とって置かれ、捨てられ（そうになっ）たのかを、人やモノの移動や、その背後にある社会関係と関連づけながらたどりました。従来の民具学のコンテクストでは、周防大島を構成する下記に列挙する地区がそれぞれ道具収集と保存の単位とされがちでした。しかし、道具の複合的な意味は、そうした隣接性のコンテクストに加えて、類似性のコンテクストにおいても評価されなければなりますまい。この点に関して、周防大島を起点に、四国、九州、本州、台湾、朝鮮半島、満洲の間で道具と技術、意匠に関する相互作用が生じていたのではないかとの仮説を得ました。この仮説を検証するため、鉄の不純物に関する分光分析の可能性について、諸研究機関と議論しているところです。（成果は、第13回日本語教育日本研究シンポジウム（香港大学専業進修学院）にて報告。宮原 暁、岡野翔太、高木泰伸「捨てられる民具――高度経済成長期における四国及びその周辺を中心に」、2023年11月20日）。

（3）陶磁器中の顔料・釉薬調査

陶磁器顔料・釉薬の分析については、本プロジェクトの中心的な課題として前年度からいくつかの分析の可能性を探ってきました。本年度の研究によって、赤色顔料と青磁釉薬の分析において興味深い成果が出せそうであることが判明してきました。（成果は、第13回日本語教育日本研究シンポジウム（香港大学専業進修学院）にて報告。陸 郭人傑、猿倉信彦、清水俊彦、篠原敬人、程 思哲、Jose Eleazar Reynes BERSALES「分光学的手法によるセブ島出土の有田焼陶磁器片分析――献上品と日用品の製法の違いについて」、2023年11月20日）。

（4）産業遺産

陶磁器顔料・釉薬分析の可能性を探る過程で、瀬戸や常滑、砥部、九谷などの国内主要産地、及び鷺歌・新竹などの台湾での生産地において、衛生陶器、碍子、ガラスなどの産業用の陶磁器やガラス製品の生産技術に関わる技術交流に関する新たな研究課題が見えてきました。これらの産業用陶磁器、ガラス素材は、東アジアの近代化はもとより、今日の半導体産業の礎ともなるものであり、日本と台湾、朝鮮半島、満洲などにおける製造、流通、消費を調査することで東アジア近代史に関する新たな知見が得られる可能性を有しています。（成果は、名古屋アジア散歩シンポジウム（金城大学）にて報告。宮原 暁「名古屋の陶磁器生産と東・東南アジア」、2023年11月4日）。

（5）Heritage Regime及び文化の所有権の文化研究

本プロジェクトにおいて、多様な道具、民具、工芸品の多元的な意味解釈の可能性を探る過程で、本プロジェクトの先にHeritage Regime及び文化の所有権に関する文化研究の沃野が広がっていることが知覚できるようになってきました。東・東南アジアにおける文化財保護は、UNESCO、ICOMOSなどの国際的な保護の枠組みと国民国家における国民統合の象徴の意味合いの狭間でさまざまな政治的な状況を生じさせてきました。そうした観点から、水中文化財や戦没者遺骨の政治性を探る試みは、文化研究の主要なトピックとなり得るかもしれません。（成果は、International Workshop on “Does ASEAN Relevancy matters? A strategic appraisal of strategic survival of middle-powers in the Indo-Pacific major power competition (1st workshop)”（國立政治大学）にて報告。Miyahara, Gyo, Ownership of Cultural Heritage and Communal Imagination: An Anthropological Case Study from the Philippines., Dec. 11, 2023.）。

（6）学問への扉

本プロジェクトに関わるテーマについて、以下の授業を行った。

古代水銀朱の分析――旧練兵場遺跡（香川県）の発掘調査を通して
森下英治先生（香川県教育委員会［香川県埋蔵文化財センター］）

元素分析および同位体比分析から見た古代ガラスの産地と交易
田村朋美先生（奈良文化財研究所都城発掘調査部 考古第一研究室［埋蔵文化財センター兼任］）

失敗作から見えるもの
中野雄二先生（波佐見町歴史文化交流館 学芸員）

大工道具をめぐる匠のコミュニケーション
坂本忠規先生（竹中大工道具館）

「山」と向き合う
釣井龍秀先生（豊永郷民俗資料館）

海を渡った民具
高木泰伸先生（大阪大学）

民具の失われた機能や用途を工学的に解析する
桃井宏和先生（元興寺文化財研究所）

陶磁器のある暮らし――フィリピン諸島の場合
Bersales先生（大阪大学）

日本から来た「モノ」たち
岡野（葉）翔太先生（大阪大学）

近代遺産の記憶
江凱斌先生（大阪大学）

横浜チャイナタウンから出土した文化遺産
伊藤泉美先生（横浜ユーラシア文化館）

東アジア・東南アジアにおける陶磁器の生産と流通を分析する
栗 建安先生（福建博物院文物考古研究所元所長・中国古陶瓷学会副会長）

「モノ的情報」研究の新たな地平

2024年度は、2023年度に立てた仮説を検証するうえで、適切なイメージング分光分析の手法のカスタマイズを行い、可能なものから分析を進めたいと考えています。類似性のコンテクストに即した「モノ」の多義的意味の分析を標榜しつつ、カルチュラル・スタディースとしてのHeritage Regime研究や、文化の所有権、産業遺産に視野を広げ、各地の歴史民俗資料館や一般市民に開かれたinclusiveな研究コミュニティが自然なかたちで生まれる素地を作りたいと考えています。

プロジェクト代表者

宮原 暁（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

清水政明（大阪大学大学院人文学研究科教授）
猿倉信彦（大阪大学レーザー科学研究所教授）
清水俊彦（大阪大学レーザー科学研究所准教授）
島薗洋介（グローバルイニシアティブ機構講師）
岡野翔太（大阪大学レーザー科学研究所特任研究員）
敖 夢玲（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）
高木泰伸（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）

プロジェクト構成員（学外）

野上建紀（長崎大学多文化社会学部教授）
吉田英樹（長崎県窯業技術センター 陶磁器科科長）
中野雄二（波佐見町歴史文化交流館学芸員／波佐見町教育委員会文化財班課長補佐）
BERSALES, Jose Eleazar R.（フィリピン・サンカルロス大学人類学科教授）
栗 建安（福建省博物院元研究員［定年退職］）
JIMENEZ VERDEJO, Juan Ramon（滋賀県立大学環境科学研究科／環境建築デザイン学科准教授）
豊島吉博（砥部むかしのくらし館館長）
広実敏彦（四国民具研究会副会長）
古賀瑞枝（周防大島町立久賀歴史民俗資料館学芸員／島の生活文化研究会学芸担当）

協力機関・連携機関

波佐見町歴史文化交流館
砥部むかしのくらし館
周防大島町立久賀歴史民俗資料館

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築

Facing the Challenges of 21st-Century East Asia: Establishing a Network for Practice-Oriented Area Studies

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、非対称戦争とテロリズム、新型感染症と公衆衛生、環境問題や核管理、国境紛争と歴史問題、あるいは少子高齢化と社会保障など、緊急性を要する21世紀課題群と東アジアとの関係性に着目しながら、若手研究者の育成を軸芯に据えた現代中国研究の「対話型」研究プラットフォームの構築を目指しています。

本プロジェクトの代表および参画メンバーが中心となる、有志の教員による「大阪大学中国文化フォーラム」は、2007年に組織化され、日本・中国大陸・台湾・韓国の国境を越えた学術交流である国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」（会議言語中国語）を十数年間にわたり主宰しており、息の長い人的交流を通じた対話の基盤を育んで参りました。

よって本プロジェクトでは、この貴重な資源や濃厚な実績を多分に活かしつつ、地域研究の学際性を「近現代の軌跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程から捉えることにより、更なるグローバルな文理融合的課題を、歴史学を機軸とする地域研究の総合化（課題群の整序と認識枠組の再検討）における不可分の領域へと再配置しながら、実践志向型地域研究へと昇華させることを試みています。

具体的には、国際セミナー開催を中心に、学生・若手研究者の積極的な参加を促す多様な企画を立案し、また「研究と教育の有機的連携」の活性化を目指しながら、「21世紀課題群と東アジアの新環境」を切り口として、新たな領域横断的研究・教育のプログラムの創成を追求しつつ、その成果をより豊かな国際関係の創出と提案に向けて活かしていくことを希求しています。

2023年の取り組みと成果

未曾有の事態となったCOVID-19パンデミックの渦中において、2022年2月に突如始まったロシアによるウクライナ侵攻は、核使用の危機をも浮き彫りとしつつ、「総力戦体制」に否応なく人びとの暮らしが組み込まれてゆく現実を浮かび上がらせ、その影響は、経済的相互依存関係を介した食糧、エネルギー危機、環境問題として形を変えながら世界各地へと波及しました。また2023年10月初頭、パレスチナ暫定自治区のガザ地区を実効支配するイスラム組織ハマスがイスラエルへの攻撃を開始し、イスラエル側も激しい空爆で応酬をするという激しい衝突によりパレスチナ情勢は緊迫し、世界を震撼させています。

このように、常に戦いの犠牲となるのは日常生活を送る市井の人々であり、それは広島、長崎への原爆投下や激しい地上戦が展開された沖縄戦が伝える戦時期日本の歴史を私たちに改めて想起させることになりました。戦後78年を経て風化が進むこれらアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ突入しつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっており、また人々が暮らしの中で直面してきた現実を、「戦後日本」だけに留まらず、東アジア全体が経験してきた歴史の文脈の中に位置付け、今日への連続性を問い直してゆくことにも目を向ける必要があるのではないでしょうか。

そこで本拠点形成プロジェクトの第2回目のシンポジウムとして、「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」を2023年10月28日［土］にオンラインにて開催し、その趣旨に鑑み、「城山小学校被爆校舎平和発信協議会」並びに「大阪大学中国文化フォーラム」に共催としてご協力頂きました。シンポジウムには国内外から100名を超える参加者が結集し、問題関心の高さが伺えました。第1部では、「戦争・戦後体験」を基軸とし、戦争体験者からは孫世代に当たる「戦無派」である学生たちが主体となって、3つの研究成果報告を行い、ディスカッサントの2人の研究者からコメントを頂きました。続く第2部では、学生たちの現地での「記録写真」を併せながら応答を行うとともに、長崎にて平和活動を行っている城山小学校被爆校舎平和発信協議会の2人の実践家に登壇頂き、日々の活動や取り組みについて紹介頂きながら、それを支える思いや願い等の貴重なお話も伺うことができました。プログラムは以下の通りです。

第1部〈基調報告〉
アジア地域史の視座から共振する戦争・戦後体験

報告①　沖縄での出会いから受けとめた「戦後」の暮らしの実相
吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）
「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」：写真家東松照明が直面し埋めようとした沖縄の現実との距離」

報告②　移動の経験から「歴史している」主体としての「歴史実践」
王 石諾（大阪大学大学院人間科学研究科DC）
「結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性のライフストーリー：対話的インタビューから見えてくる戦争認識とその継承」

報告③　自然と共存するアジア的理性の創出に向けて
冷 昕媛（大阪大学大学院人間科学研究科DC）
「社会転換期における環境ガバナンスへの参与：中国環境NGOリーダーのライフヒストリーから読み解かれる内発的自主性とその啓示」
ディスカッサント① 許 衛東（大阪大学大学院経済学研究科）
ディスカッサント② 小林清治（大阪大学大学院人間科学研究科）

沖縄戦終焉の地・摩文仁／2023年

長崎・城山小学校平和祈念館／2021、23年

（いずれも大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程 吉成哲平さん撮影）

第2部〈話題提供・総合討論〉
記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ

モデレーター：吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

① 未来に伝え継ぐべきこと「フィールドで学んだ記憶の継承への志」
第1部の報告者3名（長崎、沖縄、福島、水俣等）
「写真を介して共有するフィールドでの私たちの学び」

② 現場からのレスポンス「長崎の平和活動に込める願い」
山口政則（城山小学校被爆校舎平和発信協議会・会長）
松尾眞一郎（“天空のRAKUGAKI” drawing作家／城山小学校被爆校舎平和発信協議会・会員）
「城山小学校平和祈念館の取り組み」

③ 総合討論「他者と「共にある」ということ」

シンポジウム開催に際し、長崎、沖縄、水俣、福島等にて現地調査を行っており、多くの方々に示唆とお力添え頂きました。また本シンポジウムの成果の総括については、OUFC（Osaka University Forum on China）Booklet（三好恵真子・吉成哲平 編）（冊子体・電子版）として本年度末の発刊を予定しています。なお、本プロジェクトに関連するウェブサイトも公開しました。
（https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp）

今後の活動予定

2024年度は、プロジェクトの最終年度にあたるため、引き続き、海外共同研究者と協働しつつ、研究の総括を行う予定です。戦後の東アジア地域秩序の再編のなかで、複層的な世界を人々が生きる地域の歴史や記憶を読み解くためには、従来のように、日本、韓国、中国等といった国家の枠組みからのみ捉えるのではなく、地域史の文脈とその対話から考察していくことが重要となります。とりわけ、その地に生きる人々の生の営みにおける「記憶」や歴史へと照らし合わせることにより、より深い歴史像に結実していくことを念頭に調査を進めながら、シンポジウムや刊行物として作品を残すことを目指していきます。

プロジェクト代表者
三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）
許 衛東（大阪大学大学院経済学研究科准教授）
高橋慶吉（大阪大学大学院法学研究科教授）
豊田岐聡（大阪大学大学院理学研究科教授）
宮原 暁（大阪大学大学院人文学研究科教授）
小林清治（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）
林 礼釗（大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員）
胡 毓瑜（大阪大学大学院人間科学研究科助教）
岡野翔太（大阪大学レーザー科学研究所特任研究員／大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）

プロジェクト構成員（学外）
鄒 燦（中国南開大学日本研究院副教授）
江 沛（中国南開大学歴史学院教授）
許 育銘（台湾国立東華大学歴史学系副教授）
柳 鏞泰（韓国ソウル大学校歴史教育科教授）
周 太平（中国内モンゴル大学モンゴル学学院教授）
丸田孝志（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）
福田州平（香港大学専業進修学院・人文及法律学院・学院助理講師）
田中 仁（公益財団法人東洋文庫研究部研究員［大阪大学名誉教授］）

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

Collaborative Research into the Preservation, Accessibility, and Use of Oral History Resources

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、インタビューを通じて当事者の記憶と経験を記録するオーラルヒストリーによって生まれた資料の「保存・公開・活用」を目指して、歴史学や社会学といった複数の分野にわたる研究者だけでなく、さまざまな立場や専門性の持ち主が集まって共同研究に取り組んでいます。

人の語りは、単に過去の事実に関わる証拠のひとつというだけでなく、記憶や主観性、情動やパフォーマンスといった多様な側面から人間理解を可能にする貴重な資料です。近年では、「まちづくり」に活用されたり、芸術的創作に関連する活動でも用いられるなど、豊富な展開例が存在します。

本プロジェクトの遂行により、これまで安定的に保存できていなかった資料を守り、活用する基盤が形成され、より豊かな学術的・文化的な創造を可能にするという意義があります。また、聞き取りに取り組みたい市民を積極的に支援し、市民社会の発展に貢献することを目指しています。

2023年度の取り組みと成果、活動報告

1. メンバーの関連する成果物

前回2022年度年次報告書以来、以下のような関連する仕事に取り組んできました。

プロジェクト代表者の安岡健一は、聞き取りなど自己を言葉で表現する営みの歴史について市民社会向けの講演や学会報告などに複数取り組み、一般向け冊子などに聞き取りの意義について執筆しました。これらを通じて、関心を共有するつながりが形成され、プロジェクトの実施に大いに役立ちました。

講演

- 堺歴史文化市民講座「地域の歴史と「わたし」の歴史」（2023年1月22日）
- 近畿地区図書館地区別研修「「生きること」の基盤であるために図書館ができること」（2023年1月24日）
- 人権文化まちづくり講座「地域を学び、地域をつくる：自分史・「聞き取り」の広がり（2023年4月15日）
- 大阪大学ワニカフェ（まちづくり編）「地域の歴史、「私」の歴史」（2023年5月21日）
- 大阪歴史科学協議会2023年度大会「歴史学者の職能とオーラルヒストリーの意義」（2023年6月10日）
- 釜ヶ崎芸術大学「釜ヶ崎の表現と世間をめぐる研究会」における企画「表現すること／記録するということ」で前川紘士氏と対談（2023年7月1日）
- SGRAフォーラム「国史たちの対話」にて「「わたし」の歴史、「わたしたち」の歴史」（2023年8月8日）

著作

- 安岡健一「オーラルヒストリー：その歩みと可能性について」『REKIHAKU』10号、2023年

また、プロジェクトメンバーの福島幸宏氏、菊池信彦氏は以下の著作を刊行しました。

- 福島幸宏編『ひらかれる公共資料：「デジタル公共文書」という問題提起』勉誠出版、2023年

2. オーラルヒストリー・アーカイブ・プロジェクト研究会の継続的実施

研究会を継続的に実施しました。2024年1月31日に、メンバーの松本章伸氏による米国におけるオーラルヒストリーの現状を含む、研究状況報告を実施しました。

3. 聞き取りに取り組む市民グループとの連携

大阪府豊中市を中心に活動する一般財団法人「とよなか人権文化まちづくり協会」による、「寺本知生誕110周年イベントに向けた聞き取りプロジェクト」に代表者の安岡が助言者として参加しました。同プロジェクトでは豊中市に生まれ、戦後の部落解放運動に深く関わりさまざまな文化活動に取り組まれた寺本知（てらもとさとる）氏とゆかりのある人たちから、同氏を回顧する語りを収集し、編纂した冊子を刊行しました。2023年4月4日には大阪市住吉地区にて聞き取りを実施し、2023年9月13日には豊中市内にてイベント「寺本知さんってどんな人?」を開催し、関係者の講演などを実施しています。

プロジェクト主催者の寺本美鶴さんの感想――――――――――――――――

父・寺本知の生誕110周年記念イベントに向けての「聞き取り」は、言いだしてはみたものの最初は全くどのようにしていけばいいのは分からない状況でした。そんな中で安岡先生と出会うことができ、「聞き取り」に参加するメンバーが「聞き取り」に際しての講義をうけたのは、今にして思えば大きな一歩でした。それまで不安な一面があったのが、一度にやる気や元気が出たような気がしました。出来上がった冊子には聞き取らせていただいた方々と「聞き取り」をしてくださった人たちの人生に対する熱い想いのつまったものとなりました。なにより、聞き取らせていただいた方々が喜んで話してくださったこと、そして参加したメンバーが気持ちを通わせて取り組めたことを本当にうれしく思いました。

4. オーラルヒストリーを行う／オーラルヒストリー資料を用いた教育実践

大阪大学文学部／大学院人文学研究科の授業「文化交流史演習」「オーラルヒストリー演習」が実践してきたコロナ禍の聞き取りを踏まえ、大阪大学日本学研究室の学生を中心に「コロナ禍の声を聞く」プロジェクトを立ち上げ、2023年11月に大阪大学出版会から書籍『コロナ禍の声を聞く：大学生とオーラルヒストリーの出会い』を刊行しました。後の時代のための歴史資料としてだけでなく、コロナで最も大きな影響を被った世代の学生にとっても経験をまとめ、広く記録を呼びかけるうえで重要な意義があると考えてのことです。

阪大リーブル 77
『コロナ禍の声を聞く
大学生とオーラルヒストリーの出会い』
安岡健一 監修
大阪大学日本学専修
「コロナと大学」プロジェクト 編集
（大阪大学出版会／2023年）

2023年11月上旬に大阪大学にて実施された学園祭「まちかね祭」の期間中には、研究会メンバーの五月女賢司氏の協力を得て、吹田市立博物館所蔵のコロナ資料を展示し、来場者からコロナに関する記憶を聞き取ることに取り組みました（右上写真）。3日間で30名以上の方のご協力をいただくとともに、地図に付箋を貼る展示を通じてコロナ禍の経験を記録することができました。学園祭期間中の11月5日には刊行記念シンポジウム『コロナ禍をどう記憶するか』を開催しました。感染症史研究の第一人者である飯島渉氏（青山学院大学）の他、高校教育現場（小田歩氏）、博物館現場（五月女賢司氏）での記録の実践に関する講演をいただき、参加者がそれぞれに語り合う時間も設けました。このシンポジウムには、対面・オンライン併せて約50名が参加しました。

学園祭のほか、2023年7月8日には大阪府吹田市のららぽーとEXPOCITYにて開催された大阪大学共創DAYにて、ブースを出展し、来場者からの聞き取りに取り組み30名弱の方からの協力をいただきました。これらを通じて、各種イベントの場において短い聞き取りを実施する方法を作るための実例が得られました。

来場された方のうち、ご協力いただける方には、用意した質問事項から一つを選んでいただき、それにもとづいて約5-10分程度のインタビューを実施しました。

学生たちのプロジェクトではInstagramのアカウントを取得し、情報発信も行っています。

https://www.instagram.com/corona_voice/

今後は2024年1月に堺市東図書館での応用に取り組み、2月には豊中市内の書店にて刊行記念イベントを実施します。

今年度の演習授業においては、吹田市立博物館に所蔵されたコロナ資料に関して、学芸員の方からのご協力をいただきながら、寄贈者から当時の状況について詳しい聞き取りを行い「語り」を保存するプロジェクトに取り組んでいます。社会教育機関と大学との連携事例として位置付けています。

今後の活動予定

その他、プロジェクトで掲げた課題について引き続き検討していく予定です。特に、2024年には国際シンポジウムが開催できるよう準備に取り組みます。

聞き取りの実践と保存・活用に取り組んでみたい市民、小・中・高等学校教員、社会教育関係の方々、また共同研究の希望者からの連絡をお待ちしております。

プロジェクト代表者

安岡健一（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

プロジェクト構成員（学内）

菅 真城（大阪大学アーカイブズ教授）

プロジェクト構成員（学外）

五月女 賢司（大阪国際大学国際教養学部准教授）
福島幸宏（慶應義塾大学文学部准教授）
菊池信彦（国文学研究資料館准教授）
松本章伸（早稲田大学教育・総合科学学術院［学振PD：2022年10月より学振CPD］）
山田菊子（ソーシャル・デザイナーズ・ベース）
大野光明（滋賀県立大学人間文化学部准教授）
小黒 純（同志社大学社会学部教授）
中村春菜（琉球大学人文社会学部准教授）
福山樹里（国立国会図書館）

拠点形成プロジェクト

2023年度採択 教育プログラム開発型

人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発

Developing Digital Humanities Educational Materials to Enhance Research Data Management in the Humanities

プロジェクト概要

世界的なオープンサイエンスの潮流によって、研究分野を問わず、あらゆる研究データの公開や利活用が期待されています。オープンサイエンスとは、社会的立場や国境および組織を超えて、ある社会課題に関心のある人々が協働してすすめる研究活動であるとともに、公的資金で行われた研究成果である学術論文類と関連データは、それらの出版社と契約した人だけではなく、社会に公開し成果を還元するべきだという理念に基づく活動も指します。

オープンサイエンスを実現するためには、研究に関わる全てのステークホルダーが協力し、社会基盤を形成していく必要があります。すなわち、研究機関でオープンアクセス支援やデータ共有サービスの拡充を行うことに加えて、学生・教員などの研究者とその研究支援者が一体となって研究データの構築と管理の重要性およびその具体的な手法を学び実践していくことが鍵となります。

そのためには、簡易で実践的な教材でリテラシーを高めるのが一つの方法ですが、研究データ管理方法や情報共有は全学問分野で重要であるという共通認識はあるものの、人文学の研究分野で取り扱う研究対象や研究者の情報リテラシーに配慮した参考情報は少なく、具体的な行動をイメージしづらいのが現状です。

そこで、本プロジェクトでは、人文科学分野の研究活動を主に情報処理技術で支援する学問分野であるデジタル・ヒューマニティーズの観点から、研究データ構築・管理を啓発する学習動画教材の開発を行っています。

本教材の内容は大きく分けて二つに分かれています。一つ目はOUKAのような学術リポジトリに研究の成果としての論文やその付随データを共有することの重要性、二つ目は人文学研究でも多用される画像の公開を進める際に有用なIIIF（トリプルアイエフ）と呼ばれる仕組みについての基礎知識、実際の公開方法および応用事例の紹介です。

以下に、それぞれの内容について示します。

1. 研究データ管理と共有

国内外において、研究公正やオープンサイエンスの観点から研究データ管理はますます重要性は増しています。2013年ロンドンで開催されたG8科学大臣会合では、国境をまたぐ諸問題を解決するために必要な研究データを世界中に公開し最大限に活用させることを目的の一つとした共同声明が行われ、これに日本も参画し調印しました。その後、内閣府、日本学術会議など国が主導する形で、人権や商業的価値に配慮しながらも公正かつ相互運用性を保つ研究データを広く社会に還元する基盤の整備や連携、ルールづくり施策が議論されてきました（※1）。

具体的には、国立情報学研究所が研究データ基盤「NII Research Data Cloud（NII RDC）」を構築しており、2022年度から最大5年間で「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」に取り組んでいます。本学は、この事業に参画しており、人材育成を主とした研究データ管理体制の構築推進を担っています。現状では、研究データ管理教材を授業支援システムCLE上で動画配信しており、大阪大学学術情報庫OUKAでは教材資料を公開しているところです。

このような状況下で、デジタル化された研究データの公開と管理に比較的馴染みがない人文社会科学系学問分野の研究においても、近年では研究手法にデジタル式の計測器やセンサーを導入したり、史資料や文化財自体を直接撮影した高精度な画像や動画をWeb上に公開して、実際の研究に利用したりする機会が拡大しており、研究データ管理に関する情報ニーズが高まっています。しかしながら、研究データ管理のリテラシーやスキルは各人あるいは研究分野間で大きな格差があるのが現状です。

また、2024年度の科研費公募分からデータ管理計画書（DMP）の提出が全ての研究領域において義務化されます。そのため、研究データの出所や公開範囲、利用許諾に関する情報を速やかに集めて長期的に提出できる準備をしておく必要があります。

そこで、我々が開発した教材では、研究データ管理の際に求められる知識や考慮に入れておくべき事項として、データの記録方法、データ共有に向けた利用許諾、人権や商業的利益に配慮した公開範囲、10年以上の長期保存を考慮したOUKAリポジトリサービスの活用を適宜ピックアップして説明しました。

2. IIIF（トリプルアイエフ）を用いた画像の管理と公開、利活用

人文学研究者の多くが一次資料の代替となる高精細な画像を用いた分析を求めていることから、画像および動画の相互運用を推進する国際的な枠組みであるIIIF（International Image Interoperability Framework）に着目しました。従来、モニター画面での表示が難しい古地図や巻物のように、サイズが大きく不定形かつ文字が非常に細かい資料であっても、IIIF規格に準拠した画像であれば、ウェブブラウザ画面でGoogle Mapを操作する要領で拡大縮小しながら、調べたい部分を容易に閲覧することができます。そのため、デジタル・ヒューマニティーズの研究においても、人文学研究の多様なニーズに応えるべく、IIIF画像を用いたキュレーションや教育への応用、ならびに機械学習のためのアノテーションデータ付与機能などの開発が盛んに行われています。

そこで、当該研究者に向けてIIIFに対応した画像データの使用法および応用方法、OUKAでのIIIF画像作成を対象とするコンテンツを作成することで、研究データ公開と共有に対するモチベーションの向上が期待されます。

※1 “オープンサイエンス政策動向” 国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センター https://rcos.nii.ac.jp/document/policy/（参照 2023-12-17）

2023年の取り組み

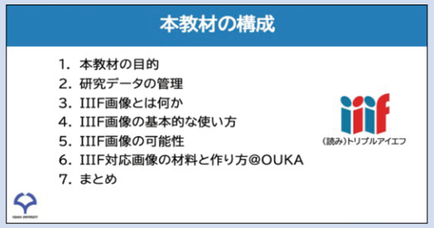
2023年は、次年度に公開することを目標に、情報共有を前提とした研究データ管理手法およびIIIF規格に準拠した画像コンテンツの利用と応用ならびに機関リポジトリOUKAを利用したIIIF対応画像の作成方法についての学習動画を作成中です。

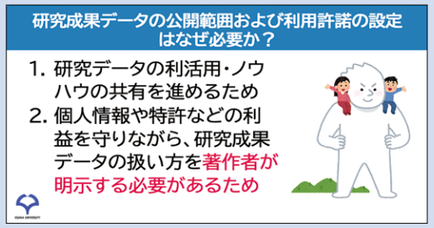
本稿執筆時は、附属図書館が作成した既存の学習動画を参考に、動画の基になるスライドおよび音声用シナリオをトピックごとに作成し、動画へ変換する作業を行なっています。その際に、国立情報学研究所（NII）が開発したシナリオの自動読み上げシステムを導入しています。

今後の活動予定

本年度に検討し作成した学習カリキュラムとそのフィードバックを分析し、FD研修や学生向けの展開についても検討を行う予定です。その際、オンライン学習動画の視聴・学習ログ等を活用したラーニングアナリティクスによって見える化した学習効果を教材作成過程に組み込むなどの可能性を模索したいと思います。

デジタル・ヒューマニティーズに関連するコンテンツについては、IIIFのみならず、デジタル・ヒューマニティーズで開発・応用されている時空間関連の基盤情報、各種データベース、市民科学や機械学習を利用したデータの収集方法などの紹介を考えています。





動画教材の構成およびコンテンツ例

プロジェクト代表者

吉賀夏子（大阪大学大学院人文学研究科人文学林准教授）

プロジェクト構成員（学内）

田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻教授）
甲斐尚人（大阪大学附属図書館研究開発室准教授）
菅原裕輝（大阪大学大学院人文学研究科人文学林特任助教）
田儀勇樹（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点デジタル日本学部門特任助教）
神崎隼人（大阪大学附属図書館研究開発室特任研究員）

協力機関・連携機関

大阪大学附属図書館
大阪大学コアファシリティ機構 データ利活用・DX化支援部門

コラム

宣教師が翻訳した和歌

キリシタン版『日葡辞書』と幕末のフュレ神父

岸本恵実
（大阪大学大学院人文学研究科教授）

日本におけるキリスト教の歴史は、戦国時代から江戸時代にかけてと、幕末以降とに、大きく二分できます。このコラムでは、日本の代表的な韻文である五七五七七の和歌が、江戸時代初めにポルトガル語で、幕末にフランス語で、カトリック宣教師たちにより翻訳されたことを紹介します。

宣教師たちは日本語を学び、日本文学について深い知識を得た人々もいましたが、本来の目的は宣教でしたから、自分たちの言語に翻訳したものは多くありません。それでも、日本文学の翻訳が本格化する明治時代以前に、宣教師たちがこうした翻訳を残しているのは興味深い事実です。

『日葡辞書』の中の和歌

キリシタン時代、文学作品といえば、宣教師用の教科書として平家物語を話し言葉にあらためた『天草版平家物語』（1592年刊）が知られています。この中に和歌の引用はあるものの、宣教師たちの日常語であったポルトガル語の翻訳はありません。今日残っている、ヨーロッパの言語による和歌の翻訳としておそらく最も古いのは、『日葡辞書』（本編1603年・補遺1604年刊）中の3首でしょう。『日葡辞書』は複数のイエズス会士により、3万3千以上の日本語にポルトガル語の語釈がつけられたものですが、用例も多く収めています。和歌もその一つだったわけです。ここでは、「いとど」の見出しに引用された1首を紹介します。

Itodoxiqu suguinixi catano coixiqini,
Vrayamaxiqumo cayeru nami cana!

〔いとどしく過ぎにし方の恋しきに、羨しくも返る波かな〕

Tẽdo grãdes saudades do Miyaco, & do que deixo atras, vẽdo estas ondas q̃ue chegão à praya, & se tornão, ô q̃ue saudades, & magoa terei vendo q̃ue não posso tornar.

〔都（Miyaco）やあとに残して来たものが恋しくてならないのに、浜辺に寄せては返すこの波を見ると、自分は帰ることができないことを考えて、なんと恋しくまた悲しいことであろう〕

アルファベットの日本語とポルトガル語が『日葡辞書』の原文、〔 〕が『邦訳日葡辞書』（1980年、岩波書店）による翻字と現代語訳です。日本語のつづりは、「し」をxiとするなどポルトガル語式になっています。

上の和歌は『伊勢物語』第七段や謡曲「杜若」などに見え、在原業平と想定される男が、都（京都）から東国へ下るさい詠んだとされるものですが、ポルトガル語訳はその背景を補って訳しています。『日葡辞書』の後まもなく刊行されたジョアン・ロドリゲスの大著『日本大文典』（1604–1608年刊）にも、日本の韻文として、漢詩・和歌・連歌の詳しい説明があります。『日葡辞書』や『日本大文典』の記述は、宣教師たちが和歌に詳しい日本人から教えを受けていたことをうかがわせます。

フュレの百人一首フランス語訳

『日葡辞書』刊行から約10年後、江戸幕府による厳しい禁教政策が始まりました。江戸時代の間、日本文学の情報を海外に提供したのは主に来日オランダ人たちでした。宣教師たちが再びその役割を担うようになったのは、19世紀半ばのことです。

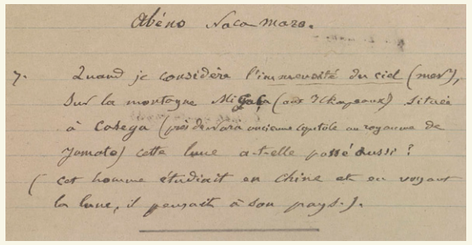
そのため時代は『日葡辞書』から200年以上下りますが、次に紹介するのは、パリ外国宣教会の神父の一人、ルイ・テオドール・フュレによる百人一首のフランス語訳

ルイ・テオドール・フュレ ©Institut de recherche France-Asie

です。現在パリ外国宣教会本部の文書室にあるこの草稿は、全く知られていなかったわけではないのですが、本格的な研究はまだありませんので、今後別のところで詳しく紹介する予定です。

パリ外国宣教会から派遣された宣教師たちは1844年以降、琉球に到着しましたが、日本入国がなかなか認められず、那覇にとどめおかれました。フュレも琉球滞在を余儀なくされた一人です。フュレの草稿はいつ何のために書かれたものか記されていませんが、琉球到着の1855年から長崎に渡った1863年までの間に作成されたものと考えられます。琉球滞在中琉球国の派遣した教師から日本語を学習していた記録があることと、長崎到着後はこのような草稿を作成する余裕がなかったと思われるためです。

フュレの百人一首訳は、以下のようにノートに1〜100の順に、よみ手の名とフランス語訳が書かれています。歌のよみ方は記されていませんが、人名や地名などの固有名詞がフランス語式のつづりで書かれています。ここでは、7番目の安倍仲麿（百人一首では伝統的に、「仲麻呂」でなく「仲麿」と書きます）の歌、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」〔大空を仰ぐと見えるあの月は、奈良の春日にある三笠山に出ていたのと同じ月であるのだな〕を引用します。



（フュレの草稿より）©Institut de recherche France-Asie

Abèno Nacamaro.
7. Quand je considère l'immensité du ciel (mer),
Sur la montagne Micaça (aux 3 chapeaux) située
à Casega (près de Nara ancienne capitale du royaume de
yamato) cette lune a-t-elle passé aussi?
(cet homme étudiait en Chine et en voyant
la lune, il pensait à son pays.).

〔安倍仲麿
7. 私が空（海）の広大さを考えているとき、
（大和王国の古い都、奈良の近くの）春日にある三笠の（三つの帽子の）山の上を、この月も通過しただろうか？
（この人は中国に留学していて、月を見ながら、自分の国を思っていた。）〕

上の画像がフュレの草稿、下がその翻刻と現代日本語訳です。原文の（ ）の箇所は、フュレが教師から聞いた解説を翻訳したものでしょう。Micaçaには書き直しのあとがありますが、Casegaはカセガと聞き間違ったままになったのかもしれません。

近い時期の百人一首フランス語訳といえば、フランスの東洋学者、日本研究者として知られるレオン・ド・ロニーのものがあります。日本の詩歌のアンソロジーである『詩歌撰葉』（1871年刊）の中に、百人一首からの抜粋とそのフランス語訳があるのです。ロニーはフュレと交流があったことがわかっていますが、ロニーはフュレ訳を参照したようではありません。なぜなら以下のように、ロニー訳はフュレとかなり異なっているためです。

SUR la voûte céleste, en ce moment où j'élève mon regard, n'est-ce pas au-dessus de la montagne de Mikasa du pays de Kasouga que la lune se lève?

〔今私が見上げる天空の上、月が昇るのは、春日の国の三笠の山の上ではないか〕

とはいえ、パリ外国宣教会の宣教師たちがフランス東洋学のネットワークとどのように関わっていたかは、今後の解明に待つところが多いようです。

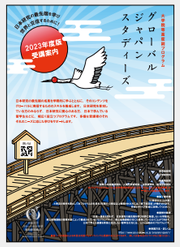
日本語を習得し、キリスト教を伝えようと苦心していた宣教師たちには、和歌の意味を汲み取り、翻訳することの困難さも理解できただろうと想像します。また、翻訳者としてだけでなく、この「天の原」の和歌は、母国を長く離れていた宣教師たちにとって、仲麿の望郷の思いに深く共感できる歌だったかもしれません。

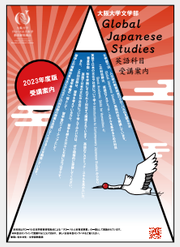
大阪大学では、学際融合教育（学部・研究科等の枠にとらわれない教育）を推進しており、その一環として、大学院に入学した学生を中心に、学生が所属する主専攻の教育課程以外の内容を学んだり、あるいは主専攻の専門性を生かすための関連分野を学んだりするための教育プログラムとして、「大学院副専攻プログラム」、「大学院等高度副プログラム」を提供しています（https://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/fukusenkou/gm_programs）。本拠点では、「大学院等高度副プログラム」の一部のプログラムを企画、運営しています。

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」

プログラム紹介

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（英語名Global Japanese Studies。以下、GJSプログラム）は、日本研究の最先端の成果を学祭的に学ぶとともに、そのコンテンツを英語で発信するためのスキルを高めることを意図して2017年に開講した教育プログラムです。現在、人文・社会科学系部局の協力のもと、グローバル日本学教育研究拠点により企画・運営されており、文系・理系を問わず、日本研究の最先端を学び世界に発信したい大学院生を対象としています。以下の3つの到達目標に対応する形で、科目が構成されています。





プログラムの到達目標（修了時に身に付く能力）

①複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。
②海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。
③日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身に付けている。

①の目標に対応して提供されているのは、日本の日本研究の最先端の成果を日本語で講じる講義科目で、②③の目標に対応して提供されているのは、英語圏の日本研究の最新の成果を学ぶ講義科目と、自分の研究成果を英語で発信する力を高めるための演習科目です。

受講生からのメッセージ

福島萌木
人文学研究科人文学専攻博士前期課程２年

私の研究内容は、シルクロードのイメージから近現代日本の姿を問うものであり、海外の日本研究を踏まえつつ専門の枠組みを超えて日本研究について学ぶ必要があったので、GJSプログラムを履修しました。日本に関する議論は想像していた以上に面白く、議論のたびに新たな問題意識が芽生えました。日本研究に関する講義もまた、私の問題意識に応えるものでした。講義では受講生の問題意識に応じて文献を紹介していただいたので、日本研究に対する理解を深めることができました。このプログラムを通じて、興味・関心の裾野を広げることができたので、日本研究について包括的に学びたい人に強くおすすめします。

Mariia SIMONCHUK
人文学研究科日本学専攻博士前期課程１年

日本学の院生として、研究の専門知識はもちろん、自身の専門外の幅広い日本研究の知識を身につけたいと思い、GJSの履修を決めました。日本語の授業のほか、英語で開講されている多くの授業を通して、国際のアカデミックな場で活用できる英語能力やライティングスキルを向上させられることも魅力的ですが、日本国外で行われている「日本研究」の視点に触れることがとても貴重だと思います。本プログラムの授業を受け、日本国内外の「日本研究」のより多面的で深い理解を得て、自身の研究へのヒントを多く得ることができました。

授業担当教員からのメッセージ

Nicholas LAMBRECHT
人文学研究科助教／
グローバル日本学教育研究拠点（グローバル拠点形成部門）兼任教員

担当科目　Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: “Interacting with Japanese Culture”
Introduction to Contemporary Japanese Studies 2: “The Japanese Short Story”
Issues in Contemporary Japanese Studies 1: “‘Global Japan’ in Literature and Film”
Issues in Contemporary Japanese Studies 2: “The Practice of Translating Japanese Media”
Basic Academic Skills for Humanities 1 & 2: “Reading for Discussion”
Advanced Academic Skills for Humanities 1: “Writing Research Papers”
Advanced Academic Skills for Humanities 2: “Presenting Research”

コロナの感染状況が落ち着き、学生全員が対面で豊中キャンパスの授業に参加するようになった今年度は、英語で行われるグローバル・ジャパン・スタディーズ科目の授業は、教室に椅子が足りなくなるぐらい賑やかに行うことができました。英語圏の「日本」に関わる最新の人文学系研究成果を共に読み議論する場として、または学生自身の博士論文研究・修士論文研究の新しい展開を英語で話し合い進展させる場として、GJSプログラムの授業が大阪大学の人文学教育と研究に欠かせない存在になってきたことは明らかです。今後もグローバル日本学教育研究拠点のサポートと支援をもとにGJSプログラムの英語による科目を提供し続け、グローバル人材と次世代の研究者の育成に貢献したいと思います。

Yulia BURENINA
グローバル日本学教育研究拠点特任講師

担当科目　Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: “Topics in Japanese Religions”
日本の文化と思想講義：「近代日本と仏教」

昨年度と同様に今年度も、前期は日本の宗教に関する様々なトピックを取り上げる英語による講義、後期は近代日本と仏教についての日本語による講義を担当しました。前期の講義では、新宗教研究やスピリチュアリティ研究への関心が高まっていることを実感しました。後期の講義では、近代における仏教と国家の関係、とりわけ戦争との関わりについて、受講生の関心がきわめて高いことがわかりました。近年の国際情勢や日本社会の現状が無関係ではないのでしょう。GJSプログラムは、まさにこうしたアクチュアルな問題関心に対して、前提知識と議論の場を提供し、国内外の学術研究の動向を踏まえた上で、日本についてグローバルな視点で考えることを目標としています。

教育プログラム

大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」

プログラムの趣旨

誰一人取り残さない社会の実現をめざして国連サミット（2015）で採択されたSDGsの目標の一つに「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」（目標4）が掲げられています。日本でも2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）が公布され、全国で夜間中学校の設置・整備が進められているほか、何らかの困難や特別なニーズを抱える児童生徒への教育・支援および課題の多い学校への支援に力が注がれています。とはいえ、まだ成果は十分とは言えません。特に近年、増加・多様化の傾向が著しい外国にルーツをもつ児童生徒への教育・支援は焦眉の課題です。本プログラムは、こうした国際的・全国的な教育課題の解決に実働的に貢献し得る高度な専門的知識・技能をもつ社会人の育成・輩出をめざします。

プログラムの到達目標（修了時に身に付く能力）

本プログラムでの学習を通して、以下の能力を備えた方に修了認定証を授与します。
①教育学の基礎知識と日本におけるマイノリティ教育の現状と課題について理解している。
②日本のマイノリティ教育の現状と課題について自分の意見をもち、論じることができる。
③日本語教育と母語保障に関する専門基礎の知識を獲得している。
④①～③の専門的知識・技能を、フィールドで課題解決にむけて適用することができる。
⑤マイノリティ教育／日本語教育・母語保障を主題とするアクションリサーチを実践することができる。

授業担当教員からのメッセージ

岡部美香
人間科学研究科教授／グローバル日本学教育研究拠点（グローバル人材育成部門）兼任教員

私は、このプログラムの取りまとめと1年次の必修科目「教育哲学特講」、2年次の「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」を担当している岡部美香（人間科学研究科）です。

2023年度春・夏学期の「教育哲学特講」では、教育学を履修するのが初めてという受講生も含めて、近代以降の学校教育の歴史を、「差異、差別、格差はどう違うのか」、「教育の領域でなぜ中心――周縁構造が生じるのか」という視点から改めて振り返りながら、これからのマイノリティ教育のあり様について、受講者全員で議論をしました。

また、「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」では、受講生が大阪府立福井高校、同西成高校、大阪府守口市立守口さつき学園夜間学級、大阪市旭区社会福祉協議会で、外国にルーツを持つ児童生徒のみなさんや「課題が多い」といわれる学校のみなさんから、多くのことを学ばせていただいています。受講生のコメントをご覧いただければ、本プログラムを通して、受講生がいかに豊かな実践知を身につけているかがわかると思います。

本プログラムは、諸般の事情により、残念ながら来年度で受講生の募集を停止しますが、夜間中学校を始めとする大阪府内の学校等との連携・協力によるフィールドワークは継続する予定です。関心のある方は、ぜひ、担当教員までご連絡ください。

受講生からのメッセージ

古守真凜
人間科学研究科博士前期課程２年

私は守口さつき学園夜間学級にて、フィールドワークを行いました。そこでは、主に2つの活動を行っていました。1つ目は、外国ルーツの生徒さん達と一緒に日本語を学ぶことです。生徒さん達とは、一緒に日本語の文章を書いたり読んだりしました。また、生徒さん達に漢字の読み方を教えたり言葉の意味を教えたりもしました。2つ目は、大阪大学の留学生が行う授業のサポーターをすることです。今年度は、ハンガリーからの留学生とモンゴルからの留学生に、先生としてさつき学園にて、それぞれの国の文化について教えていただきました。私はさつき学園の生徒さん達と一緒にその文化を学んだり、通訳することを通して留学生と生徒さん達の橋渡し役を担ったりしました。

上記の主な2つの活動以外にも、今年度はさつき学園の学校行事にも、いくつか参加させていただきました。運動会では、さつき学園の生徒さん達も他の夜間中学校の生徒さん達も一緒になって、競技に踊りに楽しんでいる光景を見させていただきました。私自身も参加でき、とても楽しかったです。さつき学園の生徒さん達と守口市の新任の先生方との交流会では、生徒さん達が書いた作文を聞かせていただきました。生徒さん達が書いた作品を直接聞くことができ、いろんなことを学ばせていただきました。

上述のフィールドワークは、私の修士論文作成にもつながりました。フィールドワークの過程で私が感じた、さつき学園の生徒さん達にとっての学びとはどのようなものなのかという問いを基に、修士論文を執筆しました。修士論文では、生徒さん達にインタビューもさせていただき、生徒さん達の生の声を聞かせていただく貴重な機会にも恵まれました。

中西美裕
人間科学研究科博士前期課程２年

今年度は大阪市旭区の社会福祉協議会が母体となって行われている学習支援教室および居場所づくり事業でフィールドワークをさせていただきました。主に中学生を対象に行われており、通っていた方が大学生になるとスタッフとして関わってくれるなど地域に根ざした活動を行っていました。少人数ゆえにスタッフと生徒が個別的に関わることができ、信頼関係の構築や丁寧な学習支援ができている場なのだと感じました。これまで、学習とは距離を置いた居場所づくりの現場を中心に観察させていただいていたため、学習を通して生徒の将来展望を聞いたり、そこから家庭の課題が見えてきたりするなど、新たな関わり方やアプローチができることを知る良い機会となりました。

教育プログラム

大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」

プログラムの趣旨

デジタルヒューマニティーズは、伝統的な人文学（ヒューマニティーズ）とデジタルとの有機的な結合により、人類知の取得、解釈、比較、参照、表現の方法などの再構成に取り組む分野横断的な研究・教育領域です。本プログラムは実証主義的なフィロロジー、言語研究、文化研究を基盤として学修するのに加え、文字や紙媒体だけでは不可能な資料・史料の理解やテクストの読み、エビデンスの可視化（visualization）、独創的なリサーチクエスチョンの創成、そして方法論的共有地（methodological commons）に基づく協働（interoperability & collaboration）などを通して、人文知の新地平を切り開く取り組みでもあります。テクストや資料、史料に最新の解析技術を応用することにより、従来のリニアなアプローチだけでは不可能な現象の把握や価値の発見、エビデンスの蓄積という営みを通して、人文学データを新たな角度から読みなおすのが当プログラムが目指すところです。

プログラムの到達目標

当プログラムは、提供する講義とコースワークを通して、人文学・社会科学の資料を的確に取得、解釈、比較、参照、表現する方法を学び、ニーズに合致した情報の鉱脈を掘り当て活用する高度な「デジタルヒューマニティーズ・リテラシー」を修得することを目標とします。

受講生からのメッセージ

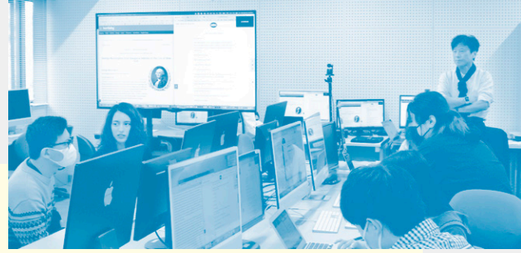
立野寛太
人文学研究科言語文化学専攻博士前期課程

この授業では、今までにない研究の手法を習得できたことが一番の収穫だと考えています。今まで扱った経験のなかったプログラミングを用いて、大統領のスピーチや小説を定量的に分析しました。初めは題材を分析するための下準備を行い、テクストを分析するまでの過程の大変さを知りました。分析を行うと、先行研究では取り上げられなかった文章の特徴を客観的な指標で示すことができるようになりました。文章同士の類似度をグループ化したり、どのような単語が共起しているのかを検証したりし、今までの研究では知り得なかった、言語研究を探索的・検証的に進められるようにするための手法について学ぶことができました。プログラミングや統計手法など、学際的な研究手法は独学では難しい分野であったので、経験豊富な田畑先生のサポート（予期せぬエラーへの対処など）といったサポートも手厚く、充実した環境で学ぶことができました。

肖 媛媛
人文学研究科言語文化学専攻博士前期課程

デジタルヒューマニティーズ基礎を受講して、大変充実した経験を得ました。内容的には、データ抽出からトピックモデリングまで、非常に詳細かつ理解しやすい講義でした。自分の研究においても、デジタルヒューマニティーズの手法を取り入れる際の系統的な流れを把握できたことは大きな収穫でした。また、様々なアプリケーションを使って実際に手を動かすことができた点も素晴らしかったです。授業内で学んだ理論や手法を直接実践できることは、理解を深めるだけでなく、将来の研究やプロジェクトに役立つスキルを身につけることができました。これにより、将来の学習や研究において、より堅実な基盤を築くことができたと感じています。授業を通じて、デジタルヒューマニティーズがどのように構築され、応用されているかについて深く理解できました。

授業担当教員からのメッセージ



田畑智司
人文学研究科教授／グローバル日本学教育研究拠点（デジタル日本学部門）兼任教員

令和5年度人文学林のデジタルヒューマニティーズ・プログラムでは「デジタルヒューマニティーズ（以下DH）基礎」、「DH特殊講義」の2科目を提供しました。

菅原裕輝先生と筆者が担当したDH基礎では、導入として、主にテクストデータを扱うDH研究小史を概観したのち、歴代米国大統領の就任演説集や近代日本文学コーパスを題材に、講義とハンズオンを組み合わせた授業を実施しました。DHに限らず、テクストは人文学研究の基盤となる資料形式です。テクストデータの構築に当たり、データの共用・相互利用やアカウンタビリティを担保するためには、Text Encoding Initiative（TEI）という国際共通符号化規格に準拠したマークアップやアノテーションに関する知識やスキルが不可欠となります。そのため、当科目では受講生にいくつかのグループに分かれ、実際にTEI準拠のテクストコーパスを編集してもらうと同時に、そのプロセスにおいて直面する様々な難点や課題をどのようにクリアしていくべきか、実体験を通して学んでもらうことに重点を置きました。さらに、編纂したコーパスを、多変量解析に代表される統計解析法や、トピックモデリングなどの機械学習に基づくテクスト分析法、ネットワークグラフなどの視覚化手法を応用して分析・考察することで、データの中にどのような言語的、社会的、文化的現象やパターンを見出すことができるか、という問いを立て議論を深めました。

他方、DH特殊講義は、吉賀夏子先生をモデレータとして、DHの様々な分野で活躍している研究者8名がオムニバス形式で最先端の研究事例と知見を示すものでした。各回の講義担当者と題目は以下の通りです。

1. **永崎研宣先生**（人文情報学研究所）「**方法論の共有地としてのDH**」、2. **河瀬彰宏先生**（同志社大学）「**文化現象の解明に向けた音楽研究**」、3. **石井正彦先生**（当研究科日本学専攻）「**DHにおける分析：日本語コーパス言語学**」、4. **中島悠太先生**（本学データビリティフロンティア機構）「**人文学と深層学習の融合**」、5. **吉賀夏子先生**「**地域の歴史文書を読み解くDH：市民科学と機械学習による歴史理解支援の取り組み**」、6. **矢野桂司先生**（立命館大学）「**バーチャル京都で時空間を重ねる――Historical GIS, Spatial History and Spatial Humanities**」、7. **橋本雄太先生**（国立歴史民俗博物館）「**DH領域のシチズンサイエンス/クラウドソーシング**」、8. **北本朝展**（人文学オープンデータ共同利用センター・国立情報学研究所）「**DHにおける構築と共有：情報学・AI・人文学ビッグデータ**」

これらの科目を通して、DHが、単にデータサイエンスを人文学史資料に適用しただけのものではなく、分野の垣根を越えた多角的、複眼的な視点から、時には巨視的に、時には微視的にデータを観察し、史資料の理解や新たなテクストの読みにつながりうるということを、少しでも受講した学生諸氏に実感してもらえたとすれば、それは担当教員の一人としてとても喜ばしいことであると思います。

TAとして体験した デジタルヒューマニティーズ基礎

藤田 郁
言語文化研究科博士後期課程

「デジタルヒューマニティーズ基礎」は、デジタルヒューマニティーズ分野の研究で使われている様々なデジタルかつ定量的な手法に触れられる、有意義な授業です。理論や知識を受動的に学ぶのではなく、ハンズオン形式で実際に受講者が作業をすることで、どのような過程を経て結果が得られるのか、適切な結果を得るためにはどのような問題や課題があるのかを学ぶことができ、様々な手法を通して、研究のヒントを得られます。TAとして複数回従事し、繰り返し受講することをおすすめしたい授業でもあります。繰り返し受講することで、理解が深まるだけでなく、それまでには気づけなかった課題や結果を見出すこともできます。技術を身につけ、応用、発展させるには反復練習が必要です。他のデジタルヒューマニティーズ関連の授業と併せながら繰り返し受講することで、研究をより良く発展させるための基礎となる授業だと思います。

コラム

他者と「共にある」ということ

ポスト体験時代の記憶の継承に向けて

三好恵真子
（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

戦争体験者から戦後派、戦無派へ

終わりの見えないウクライナ侵攻とその後の混迷が続く昨今、常に戦いの犠牲となるのは、日常を生きる市井の人々であることを改めて思い知ることになりました。戦後78年を経て風化が進むこれらアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ突入しつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっており、また人々が暮らしの中で直面してきた現実を、「戦後日本」だけに留まらず、東アジア全体が経験してきた歴史の文脈の中に位置付け、今日への連続性を問い直してゆくことにも目を向ける必要性が浮かび上がります。そこで、私たちのプロジェクト（本誌 14–15ページ）では、2023年10月28日［土］にシンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」をオンラインにて開催しました。このコラムでは参加者の中から質疑応答の際にコメントを頂くことができた、被爆体験者であり、長崎平和推進協会、長崎証言の会会員として現在も講演活動を続けておられる山川剛氏について、同氏の著作 (※1) を元にその来歴を紹介しつつ、話しを進めてみたいと思います。

長崎の被爆教師の平和活動が示唆するもの

山川氏は、小学校の6年間のうち、3年間を戦時下の国民学校で軍事主義を、のちの3年間を戦後の学校で民主主義を習うという戦中・戦後の激動を経験しており、8歳の時に長崎にて爆心地から4.3㎞の地点で被爆されました。36年間小学校に勤務され、在職中から平和教育に心血を注がれ、1980年のユネスコ「軍縮教育世界会議」や1999年のオランダ「ハーグ平和市民会議」にも参加するなど、国内外で活動してこられました。退職後も被爆体験の語り部となって高校でも「長崎平和学」を9年間担当されながら、2023年には平和活動に功績のあった人や団体を表彰する「秋月平和賞」を受賞されています。

長崎での平和教育に注視すると、敗戦・占領の混乱期を経て、被爆10年目にあたる1955年に全国に先駆けて「平和教育研修会」が被爆校である小学校にて4日間にわたり開催されました。全国各地から700名の教職員が参加し、長崎の被爆教師の生の報告をもとに、3つの分科会に分かれて、平和教育に関する具体的展開について討議され、「原水爆の恐怖は全人類のものである。われわれは原爆十周年を迎えて平和を守る決意を新たにするとともにそれぞれ持場に帰ってより強力的に平和運動を展開する」という宣言文が発表されました。しかし、この集会は1回限りで終了し、平和教育が組織的に行われるようになる「長崎市原爆被爆教師の会（被爆教師の会）」の1970年の結成まで、それから15年の月日を要することになるのです。

1961年から小学校教師として勤務していた山川氏ら教師は、上記の「被爆教師の会」結成を受けて、原爆投下から四半世紀を過ぎているものの、子どもたちが戦争や原爆をどう受けとめているかを知るために、およそ1000人の児童・生徒を対象にアンケート調査を実施しましたが、その結果は衝撃を受けるものでした。すなわち、長崎に原爆を投下した国を知らない小学生がおよそ19%いたこと、また「戦争や被爆について誰から聞くか」という設問のいくつかの選択肢の中で、最も選択されなかったのが「先生から」だったのです。こうして「子どもの無知は教師の沈黙にあったのだ。教えなければ知るわけがない。」ということを子どもたちに突きつけられ、山川氏は、その責任からこの時「被爆教師」になることを自覚し、平和教育を使命とする実践をスタートさせることになったのです。

その後、いくつもの苦難に直面しながらも平和活動を地道に続けて行った山川氏にとって、更なる転機が訪れます。定年まであと数年となる1994年、運動会のために飾る万国旗を準備している時、両親の転勤の都合による来日3年目の韓国の児童に「センセイ、ハタ　アル?」と尋ねられました。「そりゃあるさ、お隣の国だもん」と山川氏は答えたものの、万国旗は20カ国が束ねられているだけで、いくつか探しても韓国の旗が見つからなかったことに愕然としました。そこで山川氏は手作りの韓国の旗を作ったものの、この「センセイ、ハタ　アル？」への内省から、その児童がいずれ韓国に戻った時に日本をどう学ぶのだろうかと感じ、韓国から歴史教科書を取り寄せてもらい、日本の教科書でも取り扱う「韓国併合」の箇所を和訳して冊子を作りました。当時長崎の6年生が使っていた教科書での当該記述は8行だったのに対し、韓国の国定教科書の記述では補完する資料を含めて26ページにも渡っており、歴史の事実が読み取れる記述の差異を実感せざるを得ませんでした。

長崎・平和公園
（2020年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程 吉成哲平さん撮影）

当該児童が韓国に帰国した後、同じ学級だった子の母親の発案により、「山川先生と行く韓国の平和の旅」（親子23人）が実現しました。ちょうどその頃、かつての朝鮮総督府の建物を韓国政府が解体するという報に接して、その前に子どもたちに見せておこうという話になったのです。当該児童との再会を果たし、旅を終えて長崎に戻ると、母親たちが記録集を作りはじめました。親たちは「まず韓国の人々の痛みを知る努力を」、「子どもたちの将来に貴重な財産」と綴り、子供たちは、原爆被爆とは違う戦争があったことを知ることになりました。日韓の歴史認識を共有するためには、歴史記述のギャップを埋める努力なくしてはなし得ず、ささやかながらも重要な一歩を踏み出す機会になりました。

山川氏は「秋月平和賞」の授賞式にて、「子どもたちの声に導かれて今日まで歩いてきました。これまで私に関わってくれた多くの子どもたちに深く感謝しています。」と言葉を残しています。

他者と「共にある」ということ

山川氏の平和活動の軌跡を辿りながら、私は、同世代を生きた亡き父のことをぼんやりと思い起こしていました。父は実直な化学研究者でしたが、地域ボランティア活動にも熱心で、市の「子ども会育成連合会」の組織を立ち上げ長年会長を務めるとともに、定年退職後にも市の「ユネスコ協会」の事務局長を務めながら平和活動に情熱を傾けていました。市内にある2つの小学校で「戦争体験」の話をする授業を亡くなる直前まで行っており、自分の孫よりも小さな子どもたちに、父自身も子どもの頃に味わった苦しい戦争体験の記憶について語り継いでゆくという試みでした。実のところ私自身は、両親から戦争の話やその経験などを日常の中で聞くことはほとんどありませんでしたが、いま思い返すと、生きる日々の経験の中で、身体から何かを学び取り、日常の尊さから考えを深めることができていたのかもしれません。

山川氏は、私たちのシンポジウムの中で、「（歴史的）事実」とは別に「事実から何を読み取り、理解できるか」であり、また、記憶の継承のためには、モノ（遺構や碑など）を残し、人を育てることが重要であると諭してくれました。つまり、モノだけ残しても不十分であり、継承には「人を育てる」ということが肝要になるのではないかと。さらに50年間平和活動を続ける中で、「どうして、人は戦争するのですか。」という問いが子どもたちの感想の中に常に現れており、大人や教師はそれに答えてこなかったのではないかと、皆に問いかけておられました。自らも被爆者であり、生涯をかけて教師として平和活動を続けられてこられた重みが、フロアー全体にも鳴り響いていました。

日本では、戦争と敗戦という未曾有の歴史的経験に対し「真正面から、根源的に」向き合う担い手としての、思索を専門としない日常を生きる一人ひとりの民衆の営為にこそ視線が注がれるのと同時に、生き抜くための面従腹背のしたたかな二面性と共に、時として状況を無批判に受け入れもする「弱い個人」であったということ、またこうした「ひとびとの哲学」は、各々が日常を生きる中で具体的な行動として表現され、たえず変化していくものでもありました。それゆえに私たちはいま、それぞれの時代社会に生きる個々の人間の生き様を見つめながら、そこに通底する普遍的本質を見極めていく眼差しを再び取り戻していく必要があるのではないでしょうか。子どもたちの未来を守り、過ちを繰り返さないためにも、この問いに引き続き真摯に向きあっていかねばならないと思います。

※1　山川剛氏の著作
・山川剛『希望の平和学「戦争を地球から葬る」ための11章』長崎文献社（2008）
・山川剛『私の平和教育覚書』長崎文献社（2014）
・山川剛『被爆体験の継承 ナガサキを伝えるうえでの諸問題』長崎文献社（2017）

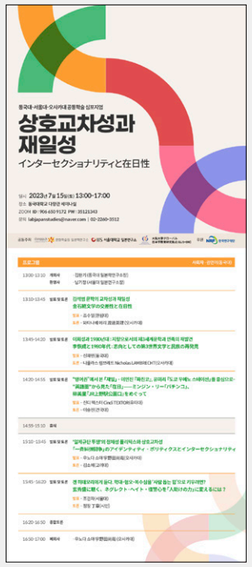
国際シンポジウム

インターセクショナリティと在日性

［開催報告］

2023年7月15日［土］に、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・東国大学校日本学研究所・ソウル大学校日本研究所共催による「インターセクショナリティと在日性」を開催しました。開催場所は、東国大学校（韓国）茶香館セミナー室で、オンラインでの配信と併せてハイブリッド形式で行いました。参加人数は44名（うち対面参加が17名）でした。

Program



日時：2023年7月15日［土］13:00–17:00
会場：東国大学校（韓国）茶香館セミナー室
（ハイブリッド開催）
使用言語：
日本語、韓国語

共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
東国大学校日本学研究所
ソウル大学校日本研究所

13:00–13:10

開会の挨拶　金煥基（東国大学校日本学研究所所長）

歓迎の挨拶　ナム・キジョン（ソウル大学校日本研究所所長）

13:10–13:45

金石範文学の交差性と在日性

登壇者＝チョ・スイル（翰林大学校）

ディスカッサント＝渡邊英理（大阪大学）

13:45–14:20

李恢成と1980年代：志向としての第3世界文学と民族の再発見

登壇者＝シン・ジェミン（東国大学校）

ディスカッサント＝ニコラス・ランブレクト（大阪大学）

14:20–14:55

“英語圏”から見た「在日」

ミンジン・リー『パチンコ』、柳美里『JR上野駅公園口』をめぐって

登壇者＝シンディ・テキスター（ユタ大学）

ディスカッサント＝イ・スンジン（建国大学校）

14:55–15:10　〈休憩〉

15:10–15:45

「一斉糾弾闘争」のアイデンティティ・ポリティクスとインターセクショナリティ

登壇者＝宇野田尚哉（大阪大学）

ディスカッサント＝キム・ソヘ（高麗大学校）

15:45–16:20

玄秀盛に聴く、ネグレクト・ヘイト・復讐心を「人助けの力」に変えるには？

登壇者＝趙寛子（ソウル大学校）

ディスカッサント＝丁 章（詩人）

16:20–16:50

総合討論

16:50–17:00

閉会の挨拶　宇野田尚哉（大阪大学）

Osaka University
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator

開催報告

宇野田尚哉（大阪大学大学院人文学研究科教授）

今年度の国際シンポジウムは、本拠点が採択・支援する「拠点形成プロジェクト」の一つ「在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築（An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature）」（本誌 8–9ページ）を基盤として開催しました。本学のニコラス・ランブレクト助教とユタ大学のシンディ・テキスター助教授を代表とするこのプロジェクトは、日本と北米の間で研究者・実作者のネットワーキングに取り組んできましたが、テーマの性格上、韓国の研究者とのネットワーキングも重要な課題であり、今回は、韓国の東国大学校日本学研究所の金煥基所長、ソウル大学校日本研究所の趙寛子副教授の協力のもと、本拠点を含む3機関の共同主催というかたちで、ソウルの東国大学校において開催しました。

テーマは、「インターセクショナリティと在日性（상호교차성과 재일성）」と設定しました。「在日」「文学」を出発点とする研究プロジェクトを、人的ネットワークの面だけでなく、研究対象や研究課題の面でも拡張することを意図してのことです。チョ・スイル報告、シン・ジェミン報告は、在日文学を代表する作家である金石範、李恢成の営みを、文学研究の枠内に限定されないより広い文脈にそれぞれ位置づけなおそうとする試みであったいえるでしょう。シンディ・テキスター報告は、北米で評価の高いミンジン・リー『パチンコ』、柳美里『JR上野駅公園口』をめぐる報告でした。とりわけ、在日コリアンではない書き手によって英語で書かれてベストセラーになりドラマ化もされた『パチンコ』は、日本においてはそれほど話題にならなかったという状況も含め、国際的対話を深める重要な手がかりであることが確認されました。宇野田尚哉報告・趙寛子報告は、在日コリアンの経験を手がかりとしながら、現代日本社会の抱える輻輳的な差別や抑圧の構造に光を当てようとする試みであったと位置づけることができます。全体として、「在日」「文学」を出発点としつつ、人的ネットワークの面でも対象や課題の面でも研究プロジェクトを拡張するという当初の目的は、十分に達成できたと思います。

コロナ禍真最中の2020年12月に設置された本拠点は、海外での活動ができない状況に置かれてきました。初めて海外で開催する学術イベントとなった今回の国際シンポジウムは、その意味でも本拠点にとってとても大きな意義を持つものとなりました。共同主催してくださった東国大学校日本学研究所、ソウル大学校日本研究所に、この場を借りてあらためてお礼を申し上げます。

総合討論の様子

ご参加いただいた先生より

趙寛子
ソウル大学校日本研究所副教授

まず、大阪大学（GJS-ERI）が在日コリアン文学の研究アゼンダーを改め、その現在的な研究の意義をグローバル文脈で深めていることに感謝したいです。私自身は、日本で、19年間も住んだ経験があり、「在日文学」と「在日」の生き様にずっと関心がありました。この度は、「在日文学」と「在日の歴史性」に関する研究のスペクトラムが韓半島と日本のみならず、アメリカにまで及んで、さまざまな研究テーマが交差していることがよく見えてきました。私自身は、日本に帰化したNPO活動家の玄秀盛氏に対する記録文学に焦点をあて、「在日の不遇性」を超えて同時代の人々に希望を与えるような生き様について考えてみました。在日としての生き方はさまざまでしょうが、その痕跡が、新たな未来の創造につながることを想像してみたいです。

参加者の皆様による記念撮影

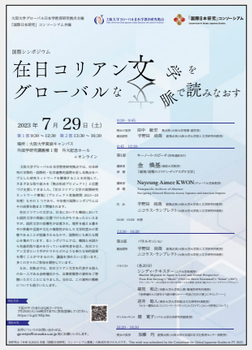
国際シンポジウム

在日コリアン文学を グローバルな文脈で読みなおす

［開催報告］

2023年7月29日［土］に、「在日コリアン文学をグローバルな文脈で読みなおす」を、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点と「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催しました。開催場所は、大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟1階大阪外国語大学記念ホールで、オンラインでの配信と併せてハイブリッド形式で行いました。参加人数は111名（うち対面参加が42名）でした。

Program



日時：2023年7月29日［土］9:30–16:30
会場：大阪大学箕面キャンパス
　　外国学研究講義棟1階
　　大阪外国語大学記念ホール
　　（ハイブリッド開催）
使用言語：
　　日英両語（第1部のみ日英同時通訳あり）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
共催：「国際日本研究」コンソーシアム

Osaka University
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

9:30–9:45

開会の挨拶　田中敏宏（拠点長／大阪大学理事・副学長）

趣旨説明　宇野田尚哉（副拠点長／大阪大学大学院人文学研究科教授）

9:45–12:30

第1部 基調講演

司会＝宇野田尚哉（大阪大学大学院人文学研究科教授）
　　ニコラス・ランブレクト（大阪大学大学院人文学研究科助教）

講演者＝金煥基（東国大学校教授）

演題　越境／混種のコリアン・ディアスポラ文学

講演者＝Nayoung Aimee KWON（デューク大学准教授）

演題　Transpacific Archives of Absence:
　　Navigating Silenced Histories Across Japanese and American Empires

12:30–13:30　〈休憩〉

13:30–16:20

第2部 パネルセッション

パネリスト

Muslim Migrants to Japan in Local and Global Perspective:
From Kim Saryang's "Mushi"(1941) to Shirin Nezammafi's "Salam"(2007)
（グローバル／ローカルな視点から見た在日本イスラム教徒：
金史良『蟲』からシリン・ネザマフィ『サラム』へ）

シンディ・テキスター（ユタ大学助教授）

金時鐘さんの詩をどう読み解くか――作品「化石の夏」にそくして――

細見和之（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

もう一層加える：ミンジン・リー『パチンコ』と「コリアン」という呼称について

逆井聡人（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

ディスカッサント＝趙 寛子（ソウル大学校日本研究所副教授）

16:20–16:30

閉会の挨拶

加藤 均（副拠点長／大阪大学日本語日本文化教育センター教授）

パネルセッションの様子

開催報告

シンディ・テキスター（ユタ大学助教授）

2023年7月29日に開催された国際シンポジウム「在日コリアン文学をグローバルな文脈で読みなおす」は、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点の支援によるプロジェクト「在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築」の集大成となりました。ニコラス・ランブレクト先生のご指導の下、本プロジェクトでは、在日コリアン文学関連のテーマを研究する世界中の研究者たちの共同研究と対話を大切に推し進めてきました。2023年7月15日に東国大学校（韓国）で開催された国際シンポジウム「インターセクショナリティと在日性」に私が参加することができたのも、このプロジェクトのおかげです。どちらのイベントも、在日コリアン文学、特に韓国語、日本語、英語の文脈で研究する研究者のグローバルなネットワークを構築するという本プロジェクトの目標を前進させるものでした。同時に、このネットワークに属する研究者たちの業績によって、国家を超えたインターセクショナルな方法で在日コリアン文学にアプローチすることの重要性が示されました。それはつまり、在日コリアンを単に日本の中のマイノリティとして捉えるのではなく、グローバルな枠組みの中で捉えるということです。大阪大学で行われたシンポジウムでの各登壇者は、このグローバルな枠組みに何らかの形で関心を持っていたと言えます。

特に、本シンポジウムの基調講演者のお二人は、この枠組みの変化が特定の意見や歴史をどのように照らし出したり、あるいは曖昧に隠してしまったりするのかという点を考えるための豊かな基盤を提供してくださいました。金煥基先生による刺激的な講演は、聴衆をある種の世界旅行に連れ出し、ディアスポラで急成長しているコリアン文学のアーカイブを探索するひとときとなりました。これらの作品には、在日コリアン文学だけでなく、中国の朝鮮族、ロシアと中央アジアの高麗人、ヨーロッパ、オーストラリア、南北アメリカの韓国系作家の作品も含まれます。これらのディアスポラ文学は韓国語だけでなくその地の言語によっても創作されており、移民、ナショナリズム、（ポスト）コロニアリズムなどの問題について探求するための有用な題材を提供しています。次に、ナヨン・エイミー・クォン先生は、冷戦と冷戦後のアメリカの覇権主義によって、歴史的記録から特定の資料が削除されたり、それらの資料が特定の研究者の手に渡されなかったりしたさまざまな状況を考察し、アーカイブへの非常に慎重なアプローチ法が提案されました。日本やその他のディアスポラの韓国人による物語のコーパスは、広大でありつつ必然的に不完全な性格を持ちます。どちらのご講演も、そのようなコーパスを正当に評価するためには、国境を越えた協力が急務であるということを具体的に示す内容でした。

午後のパネルセッションでは、基調講演者が示した幅広い展望から、特定のケーススタディが取り上げられました。まず、私自身の講演内容は、金史良とイラン生まれの小説家シリン・ネザマフィの作品における在日ムスリムの立場を通して、ポストコロニアル文学とグローバルな日本語話者による文学の違いを探るというものでした。私の論点は、日本語文学においてはグローバルとポストコロニアルはそう単純には区別できないというところにあります。続いて、細見和之先生は、ドイツ語詩人であるパウル・ツェランとの比較を通して、金時鐘の作品に新たな視点からアプローチしました。これらの両詩人の作品を並べて読むことによって、言語により歴史的なトラウマと和解しようとした金時鐘の苦心、そしてそのような言語により創作されたものを読んで解釈する者の責任を逡巡することが可能になりました。最後に、逆井聡人先生は、ミンジン・リーの『パチンコ』を取り上げ、特にアメリカと韓国での人気や影響力と比べた場合、なぜこの作品は日本語言論空間においては何の反応ももたらさなかったのかという疑問を解明するために、きわめて重要なコンテクストを付け加えました。逆井先生は『パチンコ』をアメリカにおけるアジア系アメリカ人文学と文化現象のより大きな潮流のなかに的確に位置づけ、しばしば表には出てこないアジア系マイノリティのより大きな表象を求める動きは日本語言論空間においては察知しがたいものであったことを明らかにしました。これらのパネルセッションの内容では、国家間、歴史的もしくは政治的な違いが裏表のない結論を導き出すことを阻害するなかでも ── もしくはそのような状況であるからこそ ── コンテクスト間の関連を引き出すことが重要であるという認識が共有されていたと思います。

パネルセッションに続いて行われたディスカッションでは、在日コリアン文学の研究には特殊性がかなり求められるという印象が残りました。これは、このシンポジウムと現在の在日コリアン文学・文化研究が目指す、在日コリアン文学をより広いコンテクストに位置付けるという試みに、いろいろな意味で抗うものです。日本語に対する韓国語の政治的ポジション、分断された祖国などの様々な要因により、在日コリアン文学をディアスポラのコリアン文学、日本語文学、またはその他のより大きな枠組みに位置付けることは困難なこととなっています。それでも、今回のシンポジウムから生まれたアイディアが指し示すように、これらの課題に取り組むことには十分な価値があります。私は、この使命に尽力する研究者の国際的なネットワークを積極的に構築し続けていきたいと思います。

International Symposium Report

Cindi Textor (Assistant Professor, University of Utah)

The international symposium held July 29, 2023, “Reading Zainichi Korean Literature in Global Contexts,” represents a culmination of the Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator supported project “An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature.” Under the leadership of Nicholas Lambrecht, the project has fostered collaboration and conversation among scholars working across the globe on topics related to Zainichi Korean literature. It was thanks to the project that I was also able to participate in a July 15, 2023 international symposium held at Dongguk University on “Intersectionality and Zainichi-ness.” Both events advanced the project’s goal of creating a global network of researchers of Zainichi Korean literature, especially in Korean-, Japanese-, and English-language discourses. At the same time, the collective work of scholars in this network has shown the importance of transnational and intersectional approaches to Zainichi Korean literature, situating Zainichi Koreans not simply as a minority within Japan, but in a global frame. Each of the speakers at the Osaka University symposium was in some way concerned with this global framing.

The keynote speakers in particular provided fertile ground for thinking through the ways that shifts in framing can illuminate or obscure certain voices and histories. Kim Hwangi’s exciting talk took listeners on a world tour, exploring a burgeoning archive of Korean literature in diaspora. This included not only Zainichi Korean literature, but writings by Chosonjok of China, Koryo Saram of Russia and Central Asia, and Koreans in Europe, Australia, and across the Americas. These diasporic literatures exist in Korean as well as the local languages, offering a rich vein of material through which to probe questions of migration, nationalism, (post)colonialism, and many others. Next, Nayoung Aimee Kwon offered a more cautionary approach to the archive, exploring the many ways that Cold War and post-Cold War American hegemony has excised certain material from the historical record, or kept those materials out of the hands of certain scholars. Both presentations illustrated the urgency of collaboration across national borders, in order to do justice to the expansive yet necessarily incomplete corpus of narratives by Koreans in Japan and other locations in diaspora.

Panel presentations in the afternoon session took up specific case studies within the broader landscape laid out by the keynote speakers. My own presentation explored the distinction between postcolonial and global Japanophone literatures through the position of Muslims in Japan in the work of Kim Saryang and Iranian-born novelist Shirin Nezammafi. I argued that the global and postcolonial are not so easily disentangled in Japanese-language literature. Hosomi Kazuyuki approached the work of Kim Shijong from a fresh angle, through comparison with the German-language poet Paul Celan. Reading the two poets side-by-side allowed us to see Kim’s struggle to mediate historical trauma through language, and to ponder the responsibility of readers and interpreters of such language. Finally, Sakasai Akito added crucial context to the question of why Min Jin Lee’s *Pachinko* did not garner a response in Japanese-language discourse, particularly compared to its popularity and impact in the United States and South Korea. Sakasai incisively situated *Pachinko* within a broader wave of Asian American literary and cultural phenomena in the United States, a push for greater representation of the often-invisible Asian minority that was largely illegible in Japanese-language discourse. The panel contributions were united by an impetus to draw connections across contexts, even—perhaps especially—where national, historical, or political differences stymy our efforts to draw straightforward conclusions.

In the discussion that followed the formal presentations, there remained a lingering sense that research on Zainichi literature requires a great deal of specificity. It is in many ways resistant to our efforts to situate it within broader contexts—the aim of this symposium and much of the contemporary scholarship on Zainichi literature and culture. The language politics vis-à-vis Japanese, the divided homeland, and many other factors create thorny issues for positioning Zainichi literature within global Korean literature in diaspora, Japanophone literature, or any larger framework we might choose. Still, as the ideas emerging from this event demonstrate, there is ample value in rising to those challenges. I look forward to continuing to build an international network of researchers committed to this mission.

英語原文（左ページは邦訳）

ご講演をいただいた先生方より

金 煥基
東国大学校教授

韓国政府は、2023年6月に海外同胞庁を設立し、全世界約740万人のコリアン・ディアスポラに向けた関心を一層高めています。今回、韓日両国で連続的に開催した学術シンポジウムは、国家的関心である「ディアスポラ」をキーワードに、在日コリアン文学をグローバル文学として読み解く大切な場となりました。韓国、日本、米国から参加した学者たちの発表と討論を通して、コリアン・ディアスポラを見つめる様々な視覚とアプローチを詳細に確認することができました。特に、今回の大阪大学主催の学術シンポジウムは、在日コリアン文学を中心にコリアン・ディアスポラ文学のグローカリティーとダイナミズムを確認するとともに越境／混種のディアスポラ文学に対するコラボレーション研究の可能性と必要性を確認できる大切な機会となりました。

基調講演後の質疑応答の様子

ナヨン・エィミー・クォン
デューク大学准教授

このたびは光栄にも、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点の7月のシンポジウムに登壇することができました。主催者の皆様、特に宇野田先生、ランブレクト先生、テキスター先生に、この場を借りて感謝申し上げます。また、会場のスタッフの方々、特に裏方として精力的に動き回っていただいた住川さんにもお礼申し上げます。久しぶりに大阪に戻り、大学内外の人文系研究者コミュニティの固い絆によって築かれてきた、心を揺さぶられる研究成果を目の当たりにできたのは素晴らしいことでした。私は、長年にわたりコリアン文学に関するさまざまなプロジェクトで協力してきた古い友人たちとの再会を心待ちにしていました。我々の会合はコロナ禍でオンラインに移行したこともあり、実際に会って話ができたことは大変有意義でありました。そして、猪飼野地区周辺の散策に参加でき、宇野田先生に詳しくご案内いただいたおかげで、新しく設立された大阪コリアタウン歴史資料館を訪問できたことも大変意義深いことでした。新年度が始まり、大学での教育活動に戻った今も、共に過ごした忘れがたい時間を一つ一つ心の中で整理している状況です。私にとって最も印象深かったことの一つは、金煥基先生と初めてお会いできる栄誉を頂き、基調講演でご一緒させていただいたことです。金先生はディアスポラ韓国語文学の著名な研究者であり、先生が作家・金石範の数巻にわたる傑作『火山島』の韓国語翻訳に長い年月をささげたお話を聞くことができたことはとても刺激的でした。大阪に旅立つ少し前、私はデューク大学の学生たちとの済州島への訪問から帰って来たばかりでした。私が受け持っているアメリカ人の学生たちのほとんどは、済州島四・三事件におけるアメリカと韓国の関与を初めて知ったところでした。これらの残虐行為やそれについての半世紀以上の抑圧の程度は推し量りがたいものであり、私は感情に圧倒されました。私が初めて四・三事件について知ったのは、私が今受け持っている学生たちの歳より少し上のころであり、事件を理解するのに苦労したことを覚えています。今回の経験から、私の研究・教育活動を通してこれらの抑圧された歴史を「解放」する責任を感じ、小説『火山島』の一語一語がこれまで以上に私の中で重みを持つようになったと思います。

It was an honor and a privilege to participate in the Osaka University GJS-ERI symposium in July. I would like to take this opportunity to thank the organizers especially Professors Unoda, Lambrecht, and Textor. I also send a note of appreciation to the staff—especially to Sumikawa-san who worked tirelessly behind the scenes. It was wonderful to return to Osaka after many years and to witness in person the exciting work developed by a robust community of humanist scholars at the university and beyond. It was a treat catching up with old friends with whom I have collaborated on various projects on Zainichi literature over the years. Our meetings had transitioned online during the pandemic so it was especially meaningful finally to meet again in person, and also participate on an excursion around Ikaino and visit the newly opened Osaka Koreatown Cultural Center thanks to Professor Unoda's expert guidance. As I return to teaching with the start of a new academic year, I am still processing each unforgettable moment from our time together. One of the most impressionable for me was having the honor of meeting for the first time and sharing the keynote panel with Professor Kim Hwangi. As a renowned scholar of Korean diaspora literature, it was inspiring to hear stories of the years devoted to translating writer Kim Sok-pom's multi-volume masterpiece, *Kazantō*, into Korean. Just before going to Osaka, I had returned from an excursion trip to Jeju Island with a group of Duke University students. Most of my students from the U.S. were learning about American and South Korean complicity in the Jeju 4.3 massacres for the very first time. I was overcome with emotion as it was almost too much to process the extent of these atrocities and the extent of the over half-century long repression about them. I was not much older than my students when I first heard about 4.3, and I remember struggling to understand. Each word of the novel *Kazantō* weighs heavier on me now with the responsibility to translate out these suppressed histories through my research and teaching.

英語原文（上のテキストは邦訳）

月例ワークショップ

日本研究の最先端の成果を学際的に共有することと、研究ネットワークを国際的に拡大することを目的として、会場でもオンラインでも参加できるハイブリッド形式のGlobal Japanese Studies Research Workshopを、2023年1月から12月にかけて8回開催しました。2月は、「国際日本研究」コンソーシアムの支援を受けて、メルボルン大学Asia Instituteから小川晃弘先生、Jonathan Glade先生、東京外国語大学大学院国際日本学研究院からPhilip Seaton先生を迎え、3大学の大学院生も参加するかたちで、クローズド・ワークショップを開催しました。3機関が先導して「国際日本研究」を展開していくための戦略について話し合うとともに、3機関の大学院生が日頃の研究成果を披露し、フィードバックを受けつつ交流を深めました。

また、本拠点が日本研究の取り組みを学内から公募し、支援している拠点形成プロジェクトの途中経過や最終成果の発表の場を月例ワークショップの一つとして位置づけ、拠点形成プロジェクト主催による研究会、セミナー、シンポジウムを4回開催しました。

GJS Research Workshop 2023年1月例会

「在日」文学再考――作家・温又柔さんを迎えて

日　時　2023年1月21日［土］9：00–11：00　第1部
　　2023年1月22日［日］9：00–11：00　第2部
会　場　大阪大学豊中キャンパス文法経本館2F大会議室
　　＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　第1部：107名／第2部：79名

登壇者　**第1部**　**キーノートスピーチ**
　　講演者　温 又柔（作家）
　　演題　「言葉の居場所を探して」
　　司会　渡邊英理（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

　　第2部　**パネルセッション 李良枝再読**
　　発表　山﨑信子（リーハイ大学助教授）
　　Catherine RYU（ミシガン州立大学准教授）
　　康 潤伊（創価大学総合学習支援センター助教）
　　趙 寛子（ソウル大学校日本研究所副教授）

コメント　温 又柔（作家）
　　渡邊英理（大阪大学大学院人文学研究科准教授）
司会　宇野田尚哉（大阪大学大学院人文学研究科教授）
　　Nicholas LAMBRECHT（大阪大学大学院人文学研究科助教）

GJS Research Workshop 2023年2月例会

Developing and Leading
“Global Japanese Studies” in the Asia-Pacific

日　時　2023年2月14日［火］10：30–17：00
　　2023年2月15日［水］10：00–16：45
　　2023年2月16日［木］10：00–16：00
会　場　大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構セミナー室C・D

講師　Shōya Unoda（大阪大学教授）
　　Nicholas Lambrecht（大阪大学助教）
　　Akihiro Ogawa（メルボルン大学教授）
　　Philip Seaton（東京外国語大学教授）
　　Jonathan Glade（メルボルン大学講師）

パネラー　Kiyomi Misaki（メルボルン大学）
　　Fernanda Moura（大阪大学）
　　Adam Eldridge-Imamura（メルボルン大学）
　　Tom Hu（メルボルン大学）
　　Himawan Pratama（東京外国語大学）
　　Alexander Ginnan（鳥取大学講師）
　　Ruby Ramsden（メルボルン大学）

GJS Research Workshop 2023年1月例会

講演を終えて

私たちの「冒険」

しがない一言を、これからも足し続ける

温 又柔（作家）

撮影：朝岡英輔

幼少期に来日以来、人生の節々で気づかされてきた。自分（たち）こそが「日本人」であると信じている人たちの多くが「日本語」と思っていることばの使用者に、「（日本人でない）私」は含まれていない。

例：日本語がお上手なんですね。

どうやら、彼らの多くが漠然と思い描いている「日本」や「日本語」、そして「日本人」という範囲内に、「（日本語を使っている、日本人ではない）私」は存在していない。

例：あなたの日本語は、もはや日本人そのものといったレベルですよ。

限りなく“ネイティブ”に近い日本語使用者でありながらも「非日本人」であったおかげで私は、「日本」＝「日本人」＝「日本語」＝「日本文化」と思い込んだままでいられる人たちとは別のものの見方を、早い段階からできていたように思う。でなければおそらく私も、日本語という「ことば」にとどまらず、「日本」という国名が冠された「文学」や「社会」、それが持っているとされている「歴史」――主に近現代史――と向かい合う際に、国籍・民族・言語・文化の境界を同一円心上で捉える「四位一体」の思考から、今ほど自由ではいられなかった。

国籍・民族・言語・文化の結合は盤石だと私（たち）に思わせている「理念」は、もっと疑われていい。そう気づけたことは、まちがいなく私にとって、自分自身のことばを模索する「冒険」の旅へと出る第一歩となった。

むろん、日本語圏の作家として、その「道」を美しく切り拓いた李良枝がいたからこそ、この「冒険」には価値があると私は初めから確信していたのだ。

作家になってからことあるごとに私は、李良枝の話をしてきた。李良枝の本を読んだことがない人たちに向かって、その魅力を語るのは楽しかったが、時々、私だけしか李良枝を知らないなんて、と寂しくもなった。

だからこそ、ワークショップ「「在日」文学再考」で二日間に亘って、国内のみならず、李良枝の生国・韓国や、北米在住の研究者の方々と共に、李良枝について思い切り語らう機会を授かったのは私にとってこの上なく贅沢なことで、今思い返してみても、とても幸福な時間だった。それはまさに、「国民国家」という理念に基づいた規範や尺度を疑ってかかることで、より自由になろうと目論む、私たち一人ひとりの「冒険」には価値があると実感できるひとときでもあった。とりわけ、パネリストのお一人であった趙寛子さんがご紹介くださった朴恵貞さんのことばには胸が震えた。

多くの言語の中に、私のしがない一言を足して何の意味があるのか。とはいえ、多くの言語が各各のもののように、私の言語は私のもので、私は私の言語を話すだろう（朴恵貞）。

趙さんの報告によれば、若くして亡くなった級友の遺書にあったこのことばが李良枝に「由熙」を書く覚悟を決めさせたという。私のことばは私のもので、私は私のことばをこれからも書く。願わくばそのことによって、日本語ととりあえずは呼ばれていることばの輪郭を揺さぶってみたい。この「冒険」は永遠だ。

月例ワークショップ

GJS Research Workshop 2023年3月例会

文学部ISAPプログラム講演会

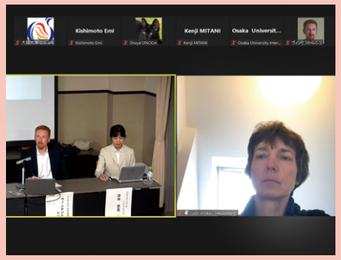
日本における消費者教育の発展とミクロレベルでの実施

日　時　2023年3月29日［水］15：30–17：00
会　場　大阪大学豊中キャンパス文法経本館2F大会議室
　　＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　22名

講演
「日本における消費者教育の発展とミクロレベルでの実施」
Vincent LESCH（ハイデルベルク大学準教授）
「ISAPプログラムの12年間をふりかえって」
Judit ÁROKAY（ハイデルベルク大学教授）

司会
岸本恵実（大阪大学大学院人文学研究科教授）

共催：大阪大学文学部国際連携室



GJS Research Workshop 2023年4月例会　**Book Talk Series**

移民が移民を考える
――半田知雄と日系ブラジル社会の歴史叙述

日　時　2023年4月27日［木］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
　　全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
　　DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　41名

ブック・トーク
Felipe MOTTA（京都外国語大学講師）

コメント
中嶋 泉（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

GJS Research Workshop 2023年6月例会

Performing Interculturality: Embodied Knowledge in the Music of Honjoh Hidejirō and Miyata Mayumi

日　時　2023年6月30日［金］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
　　全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
　　DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　14名

登壇者
籾井 徹（ハーバード大学助教授）

ディスカッサント
輪島裕介（大阪大学大学院人文学研究科教授）
鈴木聖子（大阪大学大学院人文学研究科助教）

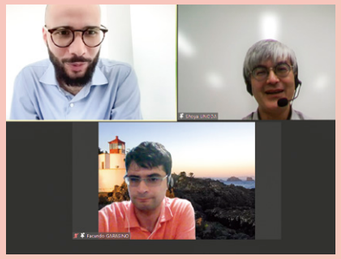
GJS Research Workshop 2023年9月例会　**Book Talk Series**

Japanese Racial Identities within US-Japan Relations, 1853–1919

日　時　2023年9月26日［火］17：00–18：30
会　場　オンライン開催
参加者　18名

ブック・トーク
Tarik MERIDA（ベルリン自由大学助教授）

コメント
Facundo GARASINO（国際協力機構緒方貞子平和開発研究所研究員）



GJS Research Workshop 2023年11月例会　**Book Talk Series**

日本近現代史ワークショップ――Laura Heinさんを迎えて

・*The New Cambridge History of Japan*: Vol. 3,
　The Modern Japanese Nation and Empire, c. 1868 to the Twenty-First Century
・『ポスト・ファシズムの日本：戦後鎌倉の政治文化』（人文書院）

日　時　2023年11月23日［木］14：00–17：00
会　場　大阪大学中之島センター セミナー室7A
参加者　22名

ブック・トーク
Laura HEIN（ノースウェスタン大学教授）

コメント
成田龍一（日本女子大学名誉教授）

GJS Research Workshop 2023年12月例会　**Book Talk Series**

Homesick Blues: Politics, Protest, and Musical Storytelling in Modern Japan

日　時　2023年12月19日［火］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
　　全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
　　DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　25名

ブック・トーク
Scott W. AALGAARD（ウェズリアン大学助教授）

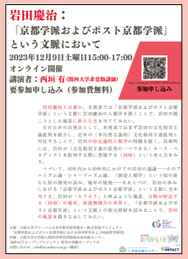
コメント
輪島裕介（大阪大学大学院人文学研究科教授）
Anita DREXLER（大阪大学大学院博士後期課程芸術学専攻）
Nicholas LAMBRECHT（大阪大学大学院人文学研究科助教）

GJS-ERI拠点形成プロジェクト研究会

岩田慶治：「京都学派およびポスト京都学派」という文脈において

日　時　2023年12月9日［土］15：00–17：00
会　場　オンライン
参加者　17名
講演者　西垣 有（関西大学非常勤講師）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト
　　「京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究」
共催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター
　　IMPACTオープンプロジェクト 哲学の実験オープンラボ



GJS-ERI拠点形成プロジェクトセミナー

道具のライフヒストリー「道具の記憶と地域資料館」

日　時　2023年12月18日［月］17：00–18：30
会　場　オンライン
参加者　11名
講演者　高木泰伸
　　（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員／宮本常一記念館・元学芸員）

コメンテーター
「日本由来の大工道具と台湾」
宮原 曉（大阪大学大学院人文学研究科教授）

司会
岡野（葉）翔太（大阪大学レーザー科学研究所特任研究員／人文学研究科招へい研究員）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト
　　「東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性」

GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム（1）

記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ

日　時　2023年10月28日［火］13：00–16：30
会　場　オンライン開催
参加者　101名（述べ参加者147名）

プログラム

13：00–13：10　趣旨説明
三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科）

13：10–15：00

第1部〈基調報告〉
アジア地域史の視座から共振する戦争・戦後体験
司会：三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科）

13：10–13：40　報告① 沖縄での出会いから受けとめた「戦後」の暮らしの実相
「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」：写真家 東松照明が直面し埋めようとした沖縄の現実との距離
吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

13：40–14：10　報告② 移動の経験から「歴史している」主体としての「歴史実践」
結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性のライフストーリー：対話的インタビューから見えてくる戦争認識とその継承
王 石諾（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

14：10–14：40　報告③ 自然と共存するアジア的理性の創出に向けて
社会転換期における環境ガバナンスへの参与：中国環境NGOリーダーのライフヒストリーから読み解かれる内発的自主性とその啓示
冷 昕媛（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

14：40–14：50
ディスカッサント1：許 衛東（大阪大学大学院経済学研究科）

14：50–15：00
ディスカッサント2：小林清治（大阪大学大学院人間科学研究科）

15：00–15：10　休憩

15：10–16：30

第2部〈話題提供・総合討論〉
記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ
モデレーター：吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

①未来に伝え継ぐべきこと「フィールドで学んだ記憶の継承への志」
写真を介して共有するフィールドでの私たちの学び
第1部の報告者3名（長崎、沖縄、福島、水俣等）

②現場からのレスポンス「長崎の平和活動に込める願い」
城山小学校平和祈念館の取り組み
山口政則（城山小学校被爆校舎平和発信協議会・会長）
松尾眞一郎（“天空のRAKUGAKI” drawing作家
／城山小学校被爆校舎平和発信協議会・会員）

③総合討論「他者と「共にある」ということ」

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト
「21世紀課題群とアジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築」
大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACTオープンプロジェクト
「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」ラボ（記憶の継承ラボ）
共催：城山小学校被爆校舎平和発信協議会／大阪大学中国文化フォーラム

第2部登壇者の山口政則氏

松尾眞一郎氏の作品

GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム（2）

『コロナ禍の声を聞く』刊行記念シンポジウム
コロナ禍をどう記憶するか～記録の意義と展望～

日　時　2023年11月5日［日］14：00–17：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス基礎工学国際棟1階セミナー室
（ハイブリッド開催）
参加者　52名

報告
「コロナ資料収集と地域博物館の使命」
五月女賢司（大阪国際大学准教授）
「高校生の目線で振り返るコロナ禍の記憶と思い」
小田 歩（大阪府立渋谷高等学校教員）
「『コロナ禍の声を聞く』編集を経て」
大阪大学文学部日本学専修「コロナと大学」プロジェクトメンバー

コメント
飯島 渉（青山学院大学、科研費基盤（A）「COVID-19のパンデミックへの歴史学的「介入」」研究代表者）
青木門斗（「#いまコロナ禍の大学生は語る」プロジェクト代表）

主催：大阪大学大学院人文学研究科現代日本学研究室
大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究」
共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

日本近現代史ワークショップ
Laura Heinさんを迎えて

開催報告

本ワークショップでは、『新ケンブリッジ版日本史』のシリーズ全体および第3巻の編者であるローラ・ハイン先生に、同書を手がかりとして英語圏の日本近現代史研究の動向について語っていただくとともに、最新刊の邦訳単著『ポスト・ファシズムの日本：戦後鎌倉の政治文化』（人文書院、2023年）を踏まえてご自身の研究関心についても語っていただきました。さらに、『新ケンブリッジ版日本史』第3巻の寄稿者でもある歴史家の成田龍一先生にコメントしていただいたうえで、幅広く意見交換を行いました。

日時：2023年11月23日［木］14:00–17:00
会場：大阪大学中之島センター セミナー室7A

《ブック・トークでとりあげた書籍》
- *The New Cambridge History of Japan*: Vol.3, *The Modern Japanese Nation and Empire, c.1868 to the Twenty-First Century*
- 『ポスト・ファシズムの日本：戦後鎌倉の政治文化 』（人文書院、2023年）

『新ケンブリッジ版日本史』第3巻（2023年）と『ポスト・ファシズムの日本：戦後鎌倉の政治文化』（2023年）をめぐって

ローラ・ハイン（ノースウェスタン大学教授）

『新ケンブリッジ版日本史』は、一般の読者に向けて大胆に新たな論点を提起している点を特徴としています。同書では、「空間論的転回」と環境史がとくに重視されていますが、このどちらもが、ローカルな場所と国家的／帝国的中心との差異や、周縁対中心という構図についての考え方の変化を、さまざまなかたちで示しています。空間論的な考え方に立つと、石炭のような日用品の圧倒的物量や、それを輸送するための設備にも、関心が向けられることになります。石炭は、重量比では明治日本の輸出品の3分の2を占めていましたが、輸出額では1%未満でした。Hiromi Mizuno と Mark Metzler は、日本における工業化と東アジアにおける輸送革命は、非常にエネルギー集約的であるとともに、アジア統合的であり、過酷な肉体労働を大幅に増加させたと指摘しています。ここには、農村から農村へと移動した、明治期の屯田兵、1930年代の満州移民、そして戦後のラテンアメリカへの移民などが含まれます。彼らは、たとえば東北から東京への移住者が若い単身者であったのとは異なり、また、農業に携わる人びとはみずからの土地と伝統から離れたがらないという通念に反し、家族で移住したのでした。

国家に支援された彼らの旅は帝国の物語をなしていますが、彼らの移動はそれぞれの理由によるものでした。この文脈でとくに有用なのは、ディアスポラという概念です。近江、宮古島、朝鮮、ロシア、米国、その他さまざまな場所から移動してきた人びとが、多様な法的・社会的構造を利用して、ディアスポラとなりました。日本の敗戦後には、浅野豊美が論じているように、引揚者が日本の政治をかたちづくりなおしました。これらの人びとの存在が示しているのは、帝国という概念が有効なのは、いくつかのタイプの分析にとってのみだということです。むしろ、近代帝国とは、本国においても同様に望ましいと想像されているユートピア像をより迅速に受け入れさせる大衆的戦略だったといえます。

Brett Walker は、環境史における大きな潮流を示しています。具体的には、1855年の安政大地震が、多額の復興費用の支出を強いたり、人びとをパニックに陥れたりすることにより、江戸幕府を弱体化したさまが論じられています。当時の人びとは、地震を、アメリカによる開国の要求やコレラの流行と関係づけて捉えました。Walker は、江戸時代の人びとが迷信的であったと論じているわけではありません。そうではなく、当時の人びとはこの時期に特有のかたちでそのような関係づけを行った、と論じているのです。安政大地震との対比でいえば、1923年に大きな被害をもたらした関東大震災は、朝鮮人や社会主義者の反乱分子から社会を守る必要性を高めるものと広く受け取られたのでした。

『ポスト・ファシズムの日本』において私が主張したのは、これまでの冷戦研究は米国側の人種主義を強調しすぎてきたため、当時を生きた多くの日本人の占領期の経験を捉えそこなっている、という点です。なぜなら、とくに地域レベルでは、占領期日本の主人公は、米国人ではなかったからです。当時の日本は、政治家たちの誤った指導の結果、飢餓に瀕していました。敗戦後の日本人は、根本的にファシスト的な立場からの現実否認を受け入れてしまっていた自分自身と向き合わねばなりませんでした。過去の自分と向き合いつつよりよい政体を構築することには、日本人のほうが、アメリカ人よりも、強い関心を持ちました。戦後日本は、専門家とアマチュアによる、演劇、音楽、映画、絵画、文学、そしてその他の無数の知的創造の、坩堝でした。このような表現活動により産み出されたものを参照すれば、占領下の検閲が日本人の心理を蝕み「正常な」愛国的表現を封じ込めてしまったとする江藤淳が最初に主張した論点は、疑わしくなります。このような人びとは、Eiko Siniawer と Tessa Morris-Suzuki が見出している、国政に忠誠心を持たず地域において近代的な市民意識を育んでいた戦前の人びとと、同じような存在でした。Erin Chung は、朝鮮籍を維持しつつ地域住民としての市民権を行使するという独特な選択をした戦後日本の在日コリアンについて、同じ議論を展開しています。

驚くべきことに、多くの寄稿者が、1970年代初頭を、日本社会が大きく変化した決定的瞬間であると捉えています。成田龍一は、人びとが日本は豊かになったけれども依然として自らを国家に捧げることを期待されていると認識した際に広範に広がった不穏な空気に注目しています。Jordan Sand は、当時における政治的目標から商業的目標への遷移に光を当てています。、当時における政府の目標から商業的目標への移行を強調しています。Andrew Gordon と吉見俊哉は、1970年代初頭を貫戦的な政治・経済システムの真の終焉と捉える点で一致しています。また、日本人も中国人も当時は現在よりはるかに和解に前向きであったことを考えると、国際関係においても、1970年代初頭は、決定的な、しかし失われてきまった機会であったといえます。1970年代は、戦争を経験していない人びとが変化を主導するようになった時期でもありました。彼らは、社会の平等と教育の機会を望んでいましたが、新たに民主化された諸組織への強い帰属意識を持ってはいませんでした。戦前の大学は特権的な空間であり、戦後に高等教育が拡大されたのちにはそこでの経験を再現することは不可能になったわけですが、若者たちは、上の世代の人びとがそこでの経験を注意深く秘匿していると誤認していました。彼らには、反ファシズムという最も重要な文脈はすでに見えなくなっていたのであり、その意味で私の本も戦後世代にとっては挽歌として響くものとなっているといえます。

邦訳＝松浦幸祐（日本語日本文化教育センター 助教）

Reflections on *The New Cambridge History of Japan*, 2023 and ポスト・ファシズムの日本 戦後鎌倉の政治文化 2023.

Laura Hein (Professor, Northwestern University)

The New Cambridge History of Japan features bold arguments for general readers. We highlight the "spatial turn" and environmental history, both of which showcase the difference between local places and their national or imperial centers, changing ideas about periphery versus center. Spatial thinking also draws attention to the physical mountains of commodities such as coal, and to the equipment that transports it. Coal accounted for 2/3 of Japanese exports by weight in Meiji Japan but under 1% in monetary value. Hiromi Mizuno and Mark Metzler show that Japan's industrialization and East Asia's transportation revolution were very energy intensive, Asia-integrated, and greatly increased hard human labor. This included rural-to-rural Meiji *tondenhei*, 1930s Manchurian settlers, and postwar emigrants to Latin America. They moved as families, unlike young single people from, say, Tohoku to Tokyo, contrary to the idea that the agrarian population was tied to their land and traditions.

Nonetheless, although state-sponsored travel is an empire story, these people moved for their own reasons. Diaspora is a particularly useful concept. Local individuals from Omi, Miyako Island, Korea, Russia, the USA and elsewhere make diaspora by using varied legal and social structures. After Japan's defeat, repatriates reshaped Japanese politics, as Asano Toyomi argues. These individuals show that the concept of empire itself is good for only some analyses. Rather, modern empires were a popular strategy for imposing more rapidly the same utopian iron grid that was imagined to be equally desirable at home.

Brett Walker demonstrates big trends in environmental history, such as how the Ansei earthquake of 1855 weakened the Edo government: by requiring expensive reconstruction and by freaking people out. They connected the quake to the recent American demands for trade and a cholera epidemic. Walker does not argue that Edo people were superstitious, but that, while all people make such connections to non-human forces, they do so in historically specific ways. By contrast, in 1923, another destructive tremblor was broadly reframed as heightening the need for protection against Koreans and socialist dissidents.

In *Post-Fascist Japan*, I argue that Cold War Studies' strong emphasis on American racism fails to capture the Occupation era experience for many of the Japanese who lived then because the Americans were not the main protagonists, especially at the local level. Japan had been brought to the brink of starvation by the actions of their own leaders. Post-defeat Japanese had to face their own former acceptance of that fundamentally fascist rejection of reality. Doing so and building a better polity captured their attention more than did the Americans. Postwar Japan was a riot of professional and amateur theater, musical performance, film, visual art, written expression, and other enormous intellectual creativity. This expressive output makes dubious the claim, first made by Etō Jun, that Occupation censorship harmed Japanese psyches and stifled "normal" patriotic expression. These people were like the prewar individuals identified by Eiko Siniawer and Tessa Morris-Suzuki who had little faith in national political systems but developed a modern sense of citizenship locally. Erin Chung makes the same argument about *zainichi* Koreans in postwar Japan, who, unusually, have chosen to retain their Korean nationality and exercise residential local citizenship.

Surprisingly, many contributors identified the early 1970s as the key moment when Japanese society lost coherence. Narita Ryuichi focuses on the widespread disquiet when people realized that even though Japan had become rich, people were still expected to sacrifice their lives for the nation. Jordan Sand highlights a transition from government to commercial goals then. Andrew Gordon and Yoshimi Shunya agree that the early 1970s was the true end of the transwar political and economic system. It was also a crucial missed opportunity internationally because both Japanese and Chinese public opinion were far more receptive to reconciliation than either are today. The 1970s was also when people who did not experience the war began driving change. They expected social equality and educational opportunity, but felt no strong sense of belonging in newly democratized institutions. Prewar universities were exclusive spaces and the postwar expansion of higher education made that experience impossible to recreate, but the youngsters wrongly assumed that the older generation was deliberately withholding it. The crucial anti-fascist context was already invisible to them, making my book an elegy for the postwar generation.

ワークショップの後で

成田龍一
日本女子大学名誉教授

コロナ禍で、「海外」の研究者との議論は、もっぱらZoomなどのオンラインとなり、「対面」で対話する機会が減りました。そうしたなか、2023年11月に、アメリカの日本研究者であるローラ・ハインさんをお招きしてのひさしぶりの対面のワークショップが開催されました。

ハインさんは、刊行が始まった『新ケンブリッジ版日本史』（全3巻予定）の編者であるとともに、自作『ポスト・ファシズムの日本』（人文書院）の日本語訳が刊行されるなど活躍中であり、時宜を得た企画となりました。ハインさんは当日も、さらなる議論を提供され、英語圏での日本研究の進展を示されました。

「日本」での「日本研究」と、（主としてアメリカとなりますが）英語圏での「日本研究」との対話を、私自身も30年ほどそれなりに行ってきましたが、2020年代の英語圏での展開に接し、あらたな潮流が生じていることを実感しました。興奮と衝撃を同時に体感することになったワークショップでした。企画・実施された宇野田尚哉さんをはじめ、関係者の方々に深くお礼申し上げます。

Graduate Conference

第5回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies

日本研究に従事する大学院生の国際発信力の強化と分野横断的な研究交流を目的として、2023年1月7日［土］に、第5回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies を「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催しました。主催組織以外からは、講師としてアン・シェリフ先生（オーバリン大学教授）、フェリッペ・モッタ先生（京都外国語大学講師）が参加してくださり、5名の大学院生が研究発表を行いました。

日時：2023年1月7日［土］
会場：大阪大学豊中キャンパス 基礎工学国際棟 セミナー室
共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
「国際日本研究」コンソーシアム

Time	Speaker
10:15–10:30	Opening Remarks (UNODA Shōya and Nicholas LAMBRECHT, Osaka University)
10:30–10:50	Introductions of Panelists and Commentators
10:55–12:15	PANEL #1
10:55	“Flowers Grow on Graves from the Mouths or Hearts of Holy Persons”: Common Literary Types and Motifs in Japanese and Spanish Tales (Marta AÑORBE MATEOS, Nagoya University)
11:35	*Kirishitan* History and Historiography: Understanding Communities and Individuals during the Sengoku and Early Edo Periods (Victor LAUBENSTEIN, Tokyo University of Foreign Studies)
12:15–13:30	Lunch Break
13:30–15:30	PANEL #2
13:30	Mizuki Shigeru’s Works Revisiting the War Zone: From Essays to Manga (KOJIMA Akira, Nagoya University)
14:10	Where the Wild Things Are in Contemporary Tokyo: Half-Japanese, Half-Taiwanese Characters in Hou Hsiao-hsien’s *Café Lumiere* (Richard NG, Osaka University)
14:50	Punk Lives and Issues: Sustaining a Punk Public in Japan (Robert DAHLBERG-SEARS, Sophia University / The Ohio State University)
15:30–15:45	Short Break
15:45–16:45	General Discussion (Comments by Ann SHERIF, Oberlin College; Felipe MOTTA, Kyoto University of Foreign Studies; and the conference organizers)

パンフレット

Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

発表者の声

◎第5回Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesに参加することを通じ、英語で発表する自信がつきました。英語の原稿とスライドの準備に時間を要しましたが、その甲斐あって、発表の仕方と論点の双方について専門的なアドバイスをいただきました。また、「国際日本研究」コンソーシアムの他大学の発表者と触れ合う機会にもなり、コロナ禍のなかで長い間実現できなかった貴重な経験をすることができました。研究テーマに共通項のある学生と話し合うことで研究会や研究チームについてさまざまな新情報を入手することができ、今後、その学生と協力し、ほかの研究会で一緒にパネルを組む計画を立てようとしています。このOsaka Graduate Conference in Japanese Studiesは国際的な場で活躍するために必要な能力を身につけるチャンスになりますので、学年にかかわらず参加を強くお勧めします。

◎私は日本近現代文学を専門としており、普段の学会では日本語で発表しています。そのため英語での発表は聴く機会も発表する機会も多くありませんでした。しかし将来自分の研究を英語でも伝えられるようなスキルを身につけたいと思い、今回Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesに応募しました。このConferenceでは、文学、社会学、歴史学など様々な分野の日本に関する研究発表があります。日本に関する研究対象をどのように英語で説明するかという観点から、他の人の発表を聴けることは大変勉強になりました。また専門分野の異なる先生方や聴講参加者から、質問やフィードバックをもらうことができます。特に、わかりやすいスライドの作り方などプレゼンの仕方についてもコメントしてもらえる点は、このConferenceならではだと思います。

今回初めて英語での学会発表を経験しました。日本語作品を英語に翻訳したり、プレゼンにふさわしい英語表現を学んだりと、日本語発表では意識していなかった発表準備についても学びました。実際に発表をしてみて、質疑応答でしっかり答えられるよう事前に準備することも必要だと感じました。今回の経験を通して自分の英語発表に対する課題を知ると同時に、英語でも研究を伝えられるようになりたいという気持ちがより強くなりました。

オブザーバーの声

◎1月7日に開催された第5回Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesに参加することで、文学、映画、マンガ、歴史、音楽をはじめとした、多岐にわたるテーマの研究発表を聴かせていただき、大変勉強になりました。研究の視点と学術的な発表のスキルに関する先生方のご意見も私にとってとても参考になりました。また、今回の会議を通して、日本と世界各国から来られた先生方、また異分野の研究をしている若手研究者とも交流することができ、とても実りある時間になりました。

◎リスナーとしてコンファレンスに参加したのですが、いい勉強になりました。多岐にわたる研究発表は、日本研究を専門としていない私にとって、日本の歴史や文学に対する理解を深めるよい機会になりました。日本の先生方だけでなく海外の先生方も参加されていたので、さまざまな視点からフィードバックをいただけるというところが印象に残りました。さらに日本各地から来た大学院生の方々とディスカッションやコミュニケーションもできたので、研究の面白さを感じることができました。

コラム

「ことばの杖」を手放す／手渡す。

李良枝と温又柔

渡邊英理
（大阪大学大学院人文学研究科教授）

「ことばの杖」を手放す

「GJS Research Workshop「在日」文学再考――作家・温又柔さんを迎えて」（2023年1月21日・22日）では、2022年に没後30年となる「在日朝鮮人二世」の作家・李良枝をひとつのトピックとした。以下は、このWSで基調講演をしてくださった温又柔さんと李良枝の文学の批評的関係についての覚書である。

李良枝文学に対する温さんの敬愛の気持ちは、デビュー作「好去好来歌」（すばる文学賞）のうちにすでにして表明されている。「好去好来歌」のヒロインは、楊縁珠。縁珠は、父親の仕事の都合で、3歳の時に台湾から日本に移り住んでいる。台湾語や中国語より、日本語が得意な大学生だ。この小説の冒頭で、縁珠が赤ちゃんだった頃の夢が描かれる。

夢のような記憶の中で、赤ちゃんの縁珠は「歯のない口をあけたまま、腹の奥で力を込めてみる。やっとのことで、アァ、アァ、と声が出た、というより、漏れた、というほうが近い。声、ではなく、音だった。この、音、を出すので精一杯だった」。「アァ、とか、オォ、とかいう、あの、声とも呼べない音のような、言葉とは似ても似つかないものだけしか、やっぱり、出てこない」。

この夢について、縁珠は「わたしは、妊娠している。なのに、赤ちゃんになった夢を見た」と述べる。縁珠は妊娠している。にも関わらず、縁珠は赤ちゃんである。しかも現実の縁珠は妊娠していない。この夢は、複数の捻れを抱える。その幾重にも捻れた夢のなかで、赤ん坊であり、妊婦でもある縁珠は、「アァ」や「オォ」という「言葉とは似ても似つかない」「声、ではなく、音」をだす。

この場面は、李良枝の『由熙』を引用し批評的に翻案したものである。主人公の「在日同胞」の由熙は、ソウルのS大学国文学科の留学生。語り手の「私」は韓国語話者の韓国人である。「私」の語りは日本語で記され、作中にはハングルも織り交ぜられている。「私」と叔母の家に下宿していた由熙は、卒業間近の大学を中退し日本に帰国する。由熙を引き止めようとした「私」のもとには由熙が日本語で書いた紙の束が残された。由熙が「私」の前から姿を消した瞬間から物語は始まり、不在の由熙をめぐって回想される過去と由熙のいない現在が綴られる。

由熙は、韓国にも韓国語にも居場所をうまく見つけることができず、逃げるように日本へ帰国する。小説の結末部、由熙がオンニと慕った、語り手である「私」は、由熙が残していった手書きの日本語の紙の束を思い浮かべるのだが、その時、「私」は「ことばの杖」を手放す体験に襲われる。

> ――아（ア）
> 私はゆっくりと瞬きし、呟いた。由熙の文字が現われた。由熙の日本語の文字に重なり、由熙が書いたハングルの文字も浮かび上がった。杖を奪われてしまったように、私は歩けず、階段の下で立ちすくんだ。由熙の二種類の文字が、細かな針となって目を刺し、眼球の奥までその鋭い針先がくいこんでくるようだった。次が続かなかった。아の余韻だけが喉に絡みつき、아に続く音が出てこなかった。音を捜し、音を声にしようとしている自分の喉が、うごめく針の束に突つかれて燃え上がっていた。

この「私」の体験は、由熙が日常的に体験し、オンニこと「私」にその辛さを訴えていたものだ。

> ――아なのか、それとも、あ、なのか。아であれば야、어、여と続いていく杖を掴むの。でも、あ、であれば、あ、い、う、え、お、と続いていく杖。けれども、아なのか、あ、なのか、すっきりとわかった日がない。ずっとそう。ますますわからなくなっていく。杖がつかめない。

「アァ」という音は物質性（マチエール）である。音という物質性は、ひとつの言語体系を超えた普遍性を持っている。しかし、その音は、特定の言語体系の中で実質性（シュブスタンス）を伴うものでもある。言い換えれば、「アァ」という物質としての音は、ある言語体系の中で特定かつ固有の実質性において、つまり日本語では「あ」、韓国語では「아」において体験される。由熙が目覚めの瞬間に「口の中」でつぶやく「あ／아」は、どの言語体系にも回収されていない、文字通り「言葉にならない言葉」である。それは音が言葉になって意味に依存する手前の、空気から変わったばかりの「ことば」の響き、「ことば」未生の響きだ。

わたしたちは、日々、この響きを、ある特定の言語体系の中で位置づけ、語や文として分節し、その意味を確定させるという連続した作業を行なうことで、「言葉にならない言葉」を「ことば」にしている。「ことばの杖」とは、こうした個人の言語活動を支える前提を指すが、その前提は常に民族や国家の歴史性や象徴性に侵されている。「ことばの杖」を摑むとは、その前提を所与のものとして受け入れ自明化する行為を表現するものだろう。

しかしながら日本語話者として育った「在日同胞」であり、物心ついてから第二言語としてハングルを学んだ由熙は、言語・民族・国家の境界が一致していない状態にある。言語の境界と、民族や国家の境界が異なる由熙にとって、「ことばの杖」は所与にも自明なものにもなりえず、必死に掴みとらなければならないものだ。そうであるがゆえに由熙は「ことばの杖」をつかみ損ね、日本語と韓国語のなかで自分の居場所を探し損ねる。

韓国語を「催眠弾」のように感じる由熙は、しかし、「アジュモニとオンニ」、叔母と「私」の声が好きだ、二人の韓国語が好きだ、と告げる。「おふたりが話す韓国語なら、みなすっとからだに入ってくるんです」。由熙は、ふたりの声、その「ことば」のなかに相手の「仕草」や「表情」「視線」を見出し、個別具体の息遣いを受けとっている。

小説の結末、「私」は、「ことばの杖」を手放すことになる。それは、「私」が、由熙の残した文字の中に、由熙固有の肌理や息遣いを感じ、民族や国家に絡め取られない「ことば」、あるいは「ことば」未生の響きに手を伸ばし、触れようとしたためであろう。「私」が、声ならざる声でつぶやく아（ア）とは、由熙が目覚めの瞬間に「口の中」でつぶやく「あ」でも아でもない、あるいは、「あ」でも아でもある音のような、「ことば」未生の響きである。

「ことばの杖」、その問いを手渡す

「好去好来歌」の「アァ」や「オォ」は、先述のように、この『由熙』の「ことば」未生の響きの批評的な翻案である。しかも、『由熙』では小説の棹尾にあったその響きを、作品冒頭、言わば、生まれたての小説の言葉の場所に転生させている。「好去好来歌」の夢は、実際はしていないはずの妊娠をした時に見た夢として、すなわち、自己のなかに他者を抱え込む時の夢として語られている。さらに、夢のなかでの縁珠は、子を孕む母親ではなく、母親に孕まれた赤ん坊となっている。これは、「母性イデオロギー」として還元されるものではない。

詩人・思想家の森崎和江は、「出産」という出来事について、母親が産むでも、子が生まれるでも十分には語ることができないと言い、「出産」という経験を語る言語そのものがないこと、その「ことば」の不在について語っている。これは、男性を中心化する言語体系には、「それ以外（エトセトラ）」としてある「女子ども」を語るための言葉が未だ存在していない事態を言うものであろう。「好去好来歌」の妊娠の夢は、未だない「女子ども」を語るための言葉に通じている。未生の「女子ども」の言葉。それは、自立した主体の言語ではなく、自己のなかに他者を抱え込み、互いに他に依存しあう主体ならざる主体の「ことば」にちがいない。

『由熙』から「好去好来歌」へ、「ことばの杖」をめぐる問いは確かに手渡されている。その「ことば」のリレーは批評的なものである。温又柔さんは、李良枝から「ことばの杖」をめぐる問いを受けとり、そして、そこに、国家や民族とともにジェンダーの変数を付け加えたのだ。

Global Japanese Studies Research Workshop 2023年1月例会にて
（左：筆者、右：温又柔さん）

今年の活動を振り返って

本拠点の運営委員の方々に、今年の活動について振り返っていただきました。

宇野田 尚哉（副拠点長／グローバル拠点形成部門長／デジタル日本学部門長／人文学研究科教授）

本拠点は、2020年12月、COVID-19パンデミックの最中に発足しました。そのため、キックオフ・シンポジウムの海外からのゲストにもオンラインでご登壇いただくしかないなど、なかなか対面での国際連携を進められずにいました。今年度は、ようやくそのような制約もなくなり、はじめて海外で現地の大学とともに国際シンポジウムを開催することができました。あらためて現地でご協力くださった韓国の東国大学校日本学研究所とソウル大学校日本研究所の方々にお礼申し上げます。新年度にはさらに、海外の拠点的日本研究機関との連携を対面的関係のなかで強化しつつ、本拠点が日本研究の国際的ネットワークのなかで中核的役割を果たせるよう、努めてまいりたいと考えています。ポストコロナの本拠点の活動に、引き続きご支援を賜れましたら幸いです。

加藤 均（副拠点長／グローバル人材育成部門長／ネットワーク形成管理部門長／日本語日本文化教育センター教授）

本拠点では、グローバル人材の育成のため、Japanese Studiesを基盤とした学際的・社学連携的教育プログラムの構築支援とその全学展開を図っており、「大学院等高度副プログラム」として、既存の「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（人文学研究科主管）と「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」（人間科学研究科主管）に加え、新たに「デジタルヒューマニティーズ」（人文学研究科主管）の提供が始まりました。さらに、本学SGU事業の一環として日本語日本文化教育センターと開発を進めてきた日本の魅力紹介動画は第3弾の「Why Japan? —Japans' Cleaning Culture—」が完成し、「大学の国際化促進フォーラム」参加大学に公開されるなど、この1年、本拠点の教育的な機能強化は順調に進んできました。また、コロナ禍の沈静化を受けて、Japanese Studiesの国際的ネットワークの再構築にも乗り出し、その手始めに、日本学の重要拠点であるライデン大学との部局間学術交流協定に、本拠点も締結主体として加わりました。すでに、同様の海外数大学と同時並行的に協議が進められており、早期にその中核的部分が形成できるものと期待しているところです。

高橋慶吉（グローバル拠点形成部門／法学研究科教授）

運営委員として目立つ貢献は、残念ながら、何らできておりません。ただ、4月に開設される「グローバル日本学ユニット」（人文社会科学系オナー大学院プログラム）の準備に少し関わらせていただきました。

昨年度のことですが、アニュアルレポートに「平成を振り返る」というコラムを寄稿しました。現在、それを学術論文に発展させることはできないか思案中です。運営側にありながら、私も本拠点の活動に刺激を受けている1人ということになります。

鳩澤（ばんざわ） 歩（グローバル拠点形成部門／経済学研究科教授）

昨年は個人的にきわめてドメスティックな業務に気をとられることが多く、グローバル日本学教育研究拠点の活動と経済学研究科全体や自分の研究教育とを結びつけるという点で、振り返るとやや忸怩たる思いがあります。今日の経済学研究・教育は本来的にグローバルな性質をもつものですので、昨年度経済学研究科の松村真宏教授が「『デジタル日本学』の可能性」での報告で示したように、経済学・経営学の方面からグローバル日本学へのより積極的な参加貢献を模索していきたいと存じます。私も属する経済史・経営史研究もグローバル展開が急務ですが、学内のグローバル志向の別のプロジェクトとの連携も視野に入るでしょうか。

南 和志（グローバル拠点形成部門／国際公共政策研究科准教授）

今年度からグローバル日本学教育研究拠点の運営委員となりました。運営会議に出席させていただく中で、本拠点が教育・研究の両分野において大変活発な活動を展開していることを知りました。雑事にかまけて本拠点の活動にあまり貢献できていませんが、今後は微力ながら力になれたらと思っております。私はこれまでアメリカ・東アジア関係史に関する研究を行ってきました。2024年3月には『People's Diplomacy: How Americans and Chinese Transformed US-China Relations during the Cold War』と題した単著をコーネル大学出版会から出版予定です。今後は日本に関する研究にも着手していきたいと思っております。

渡邊英理（グローバル拠点形成部門／人文学研究科教授）

2023年1月に「GJS Research Workshop「在日」文学再考」を開催しました。基調講演に作家の温又柔さんをお迎えし、「在日朝鮮人二世」の作家・李良枝の文学をめぐって、触発的な対話の時間をもつことができました。温さんと李良枝の文学の批評的関係について、本レポートにエッセイを寄稿しましたので、ご高覧いただければ幸いです。

8月に温さんの長篇小説『魯肉飯のさえずり』が中公文庫になりました。光栄にも解説を担当し寄稿させていただいております。第37回織田作之助賞を受賞したすばらしい作品です。国家・民族と言語・文化が一致することを規範とする窮屈な社会をしなやかに問う本作。文庫化を機により多くの読み手に届くことを願っています。

野尻英一（グローバル人材育成部門／人間科学研究科准教授）

今年度よりグローバル日本学教育研究拠点運営委員を拝命いたしました。私は哲学が専門ですが人間科学研究科で「比較文明学研究室」を担当しており、グローバルな視点から日本の文化・文明を考究する研究を行っていまいりましたので、本拠点への参加はうれしいことでした。社会・経済の体制と個人・集団の意識や文化表象のありかたとの連関に関心があります。9月にはウィスコンシン大学マディソン校の東アジア研究所で日本のポップカルチャーについての講演を行ってまいりました。これは楽しい経験でした。また今年度から歴史認識をめぐる「和解」の問題に取り組む国際先導研究科研費プロジェクトも始まり、記憶と共感によるアイデンティティの形成と、それを乗り越えた和解へのアプローチに基礎理論を提供しています。こうした活動とあわせて、このたび本拠点に参加させていただいたことにより、自分の中で相乗効果が生じていくこと、それぞれの活動にフィードバックできることを楽しみにしています。

岩井茂樹（グローバル人材育成部門／日本語日本文化教育センター教授）

本年度は、直接的には特に目立った貢献はできませんでした。ですが、個人的には多くの機会を得て、国内外で講演や特別講義を行なうことができました。こうした活動を通して得た、様々な大学や研究機関との人脈や関係性を、今後の拠点の活動にも活かしていければと考えているところです。

ここで一つ予告があります。2024年3月30日にグローバル日本学教育研究拠点の後援を受け、「No Border Fest. in Minoh!」というイベントを開催することになりました。この催しは、留学生と地域の方々が、言語や年齢など様々な垣根を越えた先の世界を考え、その姿を提示する試みです。これは拠点にとっても、非常に重要な催しですので、このイベントを成功させることを、本年度最大の目標としています。

筒井佐代（ネットワーク形成管理部門／人文学研究科教授）

今年度は、春から入管法改正案の成立や登録日本語教員の国家資格の動きなど、日本社会が外国人を受け入れていくにあたっての重要な法案等が審議され、日本語教育関連の分野では様々な対応に追われています。国外では戦争が終結する気配もなく、SNSでは直視したくないような映像が日々流れてきています。このような状況にあって、もっと学生さんたちに社会に目を向けて考えてもらう必要があるのではないか、そのためにこの拠点にできることはないかと思いながら、何もできないまま1年が過ぎてしまい、情けなく感じているところです。

年間活動記録

2023年1月～2023年12月

2023年　1月	第5回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies開催 GJS Research Workshop「「在日」文学再考――作家・温又柔さんを迎えて 」開催
2023年　2月	GJS Research Workshop「Developing and Leading “Global Japanese Studies” in the Asia-Pacific」開催
2023年　3月	第11回大阪大学日本語・日本文化国際フォーラム「コロナ禍が日本語教育にもたらしたもの」開催（主催：日本語日本文化教育センター） GJS Research Workshop（文学部ISAPプログラム講演会）「日本における消費者教育の発展とミクロレベルでの実施 」開催
2023年　4月	人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」の設置に向けた準備開始（2024年度開設） GJS Research Workshop「移民が移民を考える――半田知雄と日系ブラジル社会の歴史叙述 」開催
2023年　5月	2023 年度グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」募集開始
2023年　6月	GJS Research Workshop「Performing Interculturality: Embodied Knowledge in the Music of Honjoh Hidejirō and Miyata Mayumi」開催
2023年　7月	国際シンポジウム (1)「インターセクショナリティと在日性」開催 国際シンポジウム (2)「在日コリアン文学をグローバルな文脈で読みなおす」開催
2023年　9月	第6回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesの研究発表募集開始（2024年1月開催） GJS Research Workshop「Japanese Racial Identities within US-Japan Relations, 1853–1919」開催
2023年 10月	GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」開催
2023年 11月	GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム「『コロナ禍の声を聞く』刊行記念シンポジウム：コロナ禍をどう記憶するか ～記録の意義と展望～」開催 GJS Research Workshop「日本近現代史ワークショップ――Laura Heinさんを迎えて」開催
2023年 12月	第8回 大阪大学豊中地区研究交流会にてポスター発表 GJS-ERI拠点形成プロジェクト研究会「岩田慶治：「京都学派およびポスト京都学派」という文脈において」開催 GJS-ERI拠点形成プロジェクトセミナー「道具のライフヒストリー「道具の記憶と地域資料館」」開催 GJS Research Workshop「Homesick Blues: Politics, Protest, and Musical Storytelling in Modern Japan」開催

［参加報告］
第8回大阪大学豊中地区研究交流会

懐徳堂文庫コンテンツ公開に向けたIIIF対応デジタル・アーカイブの構築

グローバル日本学教育研究拠点（GJS-ERI）での活用事例

田儀勇樹
大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任助教

2023年12月8日［金］、大阪大学豊中キャンパスにおいて、第8回大阪大学豊中地区研究交流会「知の共創」が行われました。昨年度に引き続き、本拠点も大学院人文学研究科との合同で発表者として参加いたしました。

本年度の発表では拠点の事業である、懐徳堂文庫のデジタルアーカイブの公開に向けて重要な役割を果たす、IIIF（International Image Interoperability Framework）という、画像や動画データをWeb公開し利活用を促す国際的な画像相互運用のための枠組みについて説明した上で、当枠組みを用いることで、どのようなことが可能になるかを実際のIIIF画像を表示しながら説明いたしました。その上で、本拠点におけるデジタル・アーカイブの構築は、人文科学分野の研究者が研究データの管理、公開手法を理解する上で重要な貢献を果たすことも主張しました。

例年、豊中地区研究交流会には文理を問わず様々な学術領域の研究者の方々や、市民、企業の方々もたくさん来られています。本拠点の発表にも研究者のみならず多くの方に興味・関心を持っていただくことができただけでなく、大変有意義な情報交換の場ともなりました。

合同発表者の宇野田尚哉教授と吉賀夏子准教授

田儀勇樹助教

構成員一覧

拠点長

田中敏宏 TANAKA Toshihiro	理事・副学長

グローバル拠点形成部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長 グローバル拠点形成部門長・運営委員 人文学研究科 教授
高橋慶吉 TAKAHASHI Keikichi	運営委員 法学研究科 教授
鳩澤 歩 BANZAWA Ayumu	運営委員 経済学研究科 教授
南 和志 MINAMI Kazushi	運営委員 国際公共政策研究科 准教授
渡邊英理 WATANABE Eri	運営委員 人文学研究科 教授
宮原 暁 MIYAHARA Gyo	人文学研究科 教授
三好恵真子 MIYOSHI Emako	人間科学研究科 教授
山崎吾郎 YAMAZAKI Goro	COデザインセンター 教授
安岡健一 YASUOKA Kenichi	人文学研究科 准教授
ランブレクト・ニコラス LAMBRECHT, Nicholas	人文学研究科 助教

グローバル人材育成部門

加藤 均 KATO Hitoshi	副拠点長 グローバル人材育成部門長・運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
野尻英一 NOJIRI Eiichi	運営委員 人間科学研究科 准教授
岩井茂樹 IWAI Shigeki	運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
岡部美香 OKABE Mika	人間科学研究科 教授
榎井 縁 ENOI Yukari	人間科学研究科 特任教授
永原順子 NAGAHARA Junko	人文学研究科 准教授
櫻井千穂 SAKURAI Chiho	人文学研究科 准教授
松村薫子 MATSUMURA Kaoruko	日本語日本文化教育センター 准教授
松岡里奈 MATSUOKA Rina	日本語日本文化教育センター 特任講師
ブレニナ・ユリア BURENINA, Yulia	グローバル日本学教育研究拠点 特任講師

ネットワーク形成管理部門

加藤 均 KATO Hitoshi	副拠点長・ネットワーク形成管理部門長 運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
筒井佐代 TSUTSUI Sayo	運営委員 人文学研究科 教授
岸本恵実 KISHIMOTO Emi	人文学研究科 教授
藤平愛美 FUJIHIRA Manami	日本語日本文化教育センター 講師
松浦幸祐 MATSUURA Kosuke	日本語日本文化教育センター 助教
秦 秀美 CHIN Soomi	グローバル日本学教育研究拠点 特任講師

デジタル日本学部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長・デジタル日本学部門長 運営委員 人文学研究科 教授
田畑智司 TABATA Tomoji	人文学研究科 教授
吉賀夏子 YOSHIGA Natsuko	人文学研究科 准教授
田儀勇樹 TAGI Yuki	グローバル日本学教育研究拠点 特任助教

編集後記

2023年度の年次報告書をお届けいたします。本拠点の活動の広がりを知っていただくために、今年度も、拠点形成プロジェクト、国際シンポジウム、月例ワークショップ、大学院生発表会などの報告を掲載することができました。特に、国際シンポジウムは、昨今のコロナ禍の沈静化を受けて、韓国と日本において両者を連動させる形で開催されました。海外との往来の再開は、本拠点が目指す「グローバル日本学」の形成をさらに加速させていくものと期待しているところです。

執筆者のみなさま、そして編集デザインを担当してくださった遊覧船グラフィックの西田優子さまに、心より感謝申し上げます。

（加藤）

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点のロゴについて

様々な「知」が集まり新たなものが生まれ発展していく様子を、複数の羽を持った鳥の姿で表現したデザイン。「襲（かさね）の色目」を取り入れ、多様性を表現している。

発行者＝大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
https://www.gjs.osaka-u.ac.jp

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 日本学棟101
TEL 06-6850-6394
gjs@ml.office.osaka-u.ac.jp

発行日＝2024年3月31日

Osaka University
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator